

第三回 鳴海英吉研究会・宗左近さんを偲ぶ会

〈主催〉鳴海英吉研究会

〈日時〉2006年 11月18日(土)午後1時～5時30分

〈会場〉市川・山崎パン企業年金基金会館6F第2会議室 開場: 12 時 30分 開演:午後1時

〈司会〉朝倉宏哉、鈴木比佐雄、大掛史子

◎第一部 研究・講演／講演者3名、1時～3時30分

講演者／佐藤文夫 … 鳴海節について

石村柳三 … 鳴海英吉と石橋湛山

芳賀章内 … 宗左近の詩的精神と縄文の精神性

◎第二部 スピーチと鳴海英吉の詩を朗読／3時 30分～5時

葛原りょう、尾内達也、遠山信男、

岡山晴彦、水崎野里子

◎第三部 シンポジウム／鳴海英吉の詩作における女性像 5時～5時 30分

コーディネーター／大掛史子

パネラー／山本聖子、鈴木文子

(敬称略)

◎第一部 研究・講演／講演者3名、1時～3時30分

講演者／佐藤文夫 … 鳴海節について

石村柳三 … 鳴海英吉と石橋湛山

芳賀章内 … 宗左近の詩的精神と縄文の精神性

【開会の挨拶】

朝倉宏哉 皆さんこんにちは。ただ今から「第三回鳴海英吉研究会・宗左近さんを偲ぶ会」を行います。私は朝倉宏哉と申します。千葉市に住んでおります。鳴海さんとは、三十年ほどにわたって親しくさせていただきました。今日は何かいろんな行事がダブっているようでございまして聴衆は少ないのですがおおい空席は埋まってくると思います。今日のこの会はあとでテーブル起こしされて、そっくりそのまま「COAL SACK」に載録される予定です。それではこれから五時頃まで進めてまいります。

鳴海さんがお亡くなりになったのは二〇〇〇年八月三十一日。『鳴海英吉全詩集』が出ましたのがちょうど二年後の二〇〇二年八月三十一日でございます。ちょうどその日に、鳴海さんと交流のあった十数人の詩人が新宿の専福寺、鳴海さんの菩提寺に参りまして、詩集を墓前に供えて詩集刊行の報告をしたことは記憶に新しいところです。そうして『『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会』が二〇〇三年の四月五日に、この会場で行われております。その時に、今年の六月にお亡くなりになりました宗左近先生の『鳴海英吉における「国の記憶」』という記念講演がございました。そしてシンポジウムは、鳴海英吉の詩をどう読むかというテーマで行われました。

今日は第三回目ですので、これまでの研究会を簡単に振り返ってみたいと思います。第一回の研究会は、二〇〇四年の九月四日、神楽坂エミールで行われております。この時の記念講演は長谷川龍生さんの『鳴海英吉の「列島」の詩的精神』というタイトルでございました。そして、鳴海英吉さんのお父さんが活弁士であったという縁もありまして、この時に活弁士万染り子さんによる無声映画の上映がありました。それとともに鳴海英吉さんの例の力強い詩の朗読の姿が上映されております。この時のシンポジウムは、「鳴海英吉の多彩な魅力に迫る」ということでございました。この会で特に印象に残っておりますのは、その三ヶ月後に急逝された通称ブリキヤさんと言っていました武力也さんの詩の朗読、これが大変な圧巻でございまして、津軽三味線の伴奏で「五月に死んだ ふさ子のために」という詩のすばらしい朗読がありました。そして第二回目は、去年です。二〇〇五年の十月十五日、この会場で行われました。記念講演は、柴田三吉さんの「鳴海英吉の戦争詩とアジア」、それから水崎野里子さんの「鳴海英吉の演歌的叙情性と国際性」でございました。スピーチと朗読のあと、シンポジウムは「鳴海英吉の詩と朗読」でした。ということで、これまで鳴海さんの多彩な面を掘り下げた研究会が行われています。今日は「第三回」とありますが、全詩集刊行を祝う会を含めると、実質的には第四回ということになります。今日は、お手元のプログラムによって進めてまいりたいと思います。

最初は、佐藤文夫さんによる「鳴海節について」でございます。佐藤文夫さんは、『全詩集』刊行の刊行委員でありますとともに、鳴海さんとは共に「詩人会議」や「炎樹」で同人として、その他に鳴海さん

と縁の深いのは、鳴海さんは京成沿線の酒々井、佐藤文夫さんは隣の佐倉でありまして、まあ言ってみれば隣組のような関係でございます。「鳴海節」というこの「節」について今日はどのようなお話になるか、大変興味深いわけでございます。佐藤文夫さんは、詩人であるとともに民謡研究家として知られております。『民謡の心とことば』、また『詩と民謡と和太鼓と』という著作があります。

そして、佐藤さんにご登場願う前に一つだけご紹介したいことがあります。このレジュメの最後のページをご覧ください。これは「ラジオ深夜便 こころの時代」という、番組のプログラムでございますが、十一月二十三日と二十四日のところに「風が叫び、土が歌う」ということで、佐藤さんがNHKラジオの第一放送に出演することになっております。この時間帯はまあ深夜便でございますので(笑)深夜も深夜、……というよりも朝方と言った方が良くかも知れませんが、午前四時のニュース五分が終わったあとに四十五分間の佐藤文夫さんの放送がございますので、興味のある方はぜひお聴きになっていただきたいと思います。それでは佐藤さん、よろしくお願いします。

今ご紹介がありましたが、私は佐倉に住んでおりまして、鳴海さんは宗吾霊堂のある酒々井に住んでおります。そして、七八年ですから今から二十六年前の五月二十日に、たまたま私と鳴海さんは京成電車で東京の方へ向かったんですね。その日はどういう日かといいますと、成田空港が開港する日で大変騒然としていました。その騒然とした成田を後にして二人で東京へ向かって行ったというのは何かというと、その五月二十日に鳴海さんが壺井繁治賞を受賞したんですね、その授賞式に向かって私と鳴海さんは行っていたんです。鳴海さんがその時に言ったのは、「成田に一番近い所」に居て、成田の詩を一つも書いてない。遠くシベリアの詩ばかり書いている。それでその本で賞をもらうというのは非常に皮肉なことだなどと、そんな話をしながら二人で東京へ向かって行ったわけです。その時の詩人会議の委員長は黒田三郎さんでした。そして黒田さんは?ちよっとこれは裏話ですが、壺井賞の賞金はその年から十万円になったんですね。それでそのお祝いの袋の中に黒田さんは二万円しか入れてない(笑)、渡さなかったんです。というのは、全部渡すと鳴海さんが全部使っちゃう。残りは奥さんにやろうというので、袋の中に二万円だけ入れて手渡したんです。そんなエピソードがあります。

それで、鳴海さんが受賞したのは『ナホトカ集結地にて』という詩集です。(手元の詩集を示して)これが定本の『ナホトカ集結地にて』です。そしてこの本は、後書きに《この本は、シベリヤで死んだ兵士たちの慰魂歌を書くつもりではありません》と。ところが、この本をいただいた時に私は、鳴海さんがここ(詩集の扉を開いた部分)にちよっとこういう字を書いてくれたんです。何を書いてあるかというところ、この詩集はお墓のような恰好をしていますというんですね。本当にそうなんですよ。だから本人は「慰霊のためじゃない」と言うけれども、何かどこか心の中でそういうお墓、兵士たちのお墓を意識していたんじゃないかなと思うんです。このことは、またあとでお話しします。

そして、鳴海さんと私の出会いの最初は、この『風呂場で浪曲を…』という詩集です。これが鳴海さんの第一詩集なんです。それで、この時の出版記念会の……これがいつ出たかという……奥付が昭和五十年だから一九七五年ですね。そしてこれが鳴海さんの非常に画期的な詩集だと私は思うんです。この中には例のシベリヤの「ナホトカ集結地にて」も入っています。それから、その後出てくる「へんろみち」、お遍路ですね、そういう詩も入っています。それから、いわゆる今日話します「鳴海節」、これが使われたところの「風呂場で浪曲を…」、この三つが入っているんですね。この小さい一冊に鳴海さんのこれから先の仕事の、こういう『全詩集』ができましたが、これができる基がこの中にあると私は思うんです。ですから、もちろん「風呂場で浪曲を…」はここに集録されていますが、ぜひお読み頂きたいと思います。

ここにたまたま葉書がありました。これはこの『風呂場で浪曲を…』の出版記念会をやろうというので、発起人は、今日お見えになります石井藤雄さん、それから上林猷夫、斉藤正敏さん、それから私、それから城侑さん、諏訪優さん、今日お見えになっています遠山信男さん、それから中上哲夫さん、宮尾治さん、それから亡くなりましたけど村岡空さんといった方で、「人生五十三歳にして初めて処女を失い、詩集を出した。千葉県は酒々井の住人鳴海英吉とその詩集を着に有志相集い、春まだ

浅き神楽坂にて一夜じつくりと酒を酌み交わしたいと思います」というんですね。五十三歳で初めての処女詩集、というんですね。ですから五十三歳からの鳴海英吉の出発であった。しかし、一九三九年頃からもう詩は書いているんですね、若い時から。今日はそのことを、いかにしてこの鳴海さんの「節」が形成されたかということをお話したいと思います。

鳴海さんがこの『ナホトカ集結地にて』で壺井賞を受賞された時に、さまざまな方から声が寄せられました。そして亡くなった時に、この『全詩集』ができたあとに、その間鳴海さんがよく詩を書いていたのは鈴木さんの「COAL SACK」、斉藤正敏さんなどの「光芒」、それから芳賀さんらの「鮫」、私たちの「炎樹」、立川千年さんらの「オゴロ」というのがありますが、この五つの雑誌がだいたい鳴海さんが詩を発表している場所だったと思います。あと、「舟」とかありますけど。亡くなった時に、この五つの雑誌が一斉に追悼の詩を掲載したんですね。それは何と、十四人の詩人がそれぞれの想いを込めて追悼詩を書いています。そして四十五人に及ぶ詩人たちが鳴海さんの死について追悼のこトバを寄せるという、そういう鳴海さんの支持層といいますか、ファンといいますか、多かったということがこれだけでも分かると思うんです。

そうすると鳴海さんが亡くなった時にどういう追悼の言葉があったか、私は出版社で編集の仕事をしていましたので、ちょっとそれを編集して皆さんのこトバを少しご紹介したいと思います。

「そこに刻み込まれた民衆の生き様を血肉化し、こトバのリズムのうちに現前化させようとする知的で澆刺とした想像力が、それらの詩を書かせている」―これは川島洋さん。それから、「鳴海節とも言える独特の語り口の飾らぬ真摯さ」―これは大掛史子さん。「過酷な歴史を生き抜いた人々の暮らしとを考え、分かりやすい話し言葉で独特のリズムで書く」―これは佐川亜紀さん。「リアリズムという手法の強さを借りて生身の人間の痛みを書いた」―これは斉藤正敏さん。「詩を朗読する彼の声は大きくてよく通り、詩が人間世界でまだ生きていることを実感させてくれるのに十分だ」?これは松下和夫さん。「鳴海さんの詩は体験に裏打ちされていて、何よりも単純で明快である。そして何といっても最大の魅力はその語り口、その切り口上の巧さ、粋な啖呵を聞いているようなリズム感、主張精神がある」―これは山佐木進さんですね。「詩の朗読になると、頑として詩人の独自の本领が感情を露わにした声や読み方に現れていた。『詩はこういうものなんだ』と訴えていたように思う」?これは本田和也さんですか。「今まで聞いた朗読の中で、彼の朗読こそ一、二を争う魂の入った朗読であり、破鐘のような声とその迫力とともに太刀打ちできるものではない」―これは高橋馨さんです。「その手法はリアリズムそのものであり、的確な把握と微細な描写で構成されていた」―これは芳賀章内さん。「飄々とした語り口、秘められた鋭い主張の切っ先が全体を実に生き生きとさせている」―前田美智子さん。それから「地獄を見つめるようなボードレール、エリオットの西洋詩の伝統とは対極的に、地獄に対しても深刻にならず『てやんでえ、べらぼうめえ』とケツをまくってしまうような江戸庶民のような感覚」―これは三浦健治さんですね。それ以外に鳴海英吉論というのが出ました。これは遠山さんが七九年の六月号詩人会議に発表されていますが、それからあと、高田真さんが鳴海英吉論を書かれています。遠山さんの見解は、「私は驚いた。独特の語り口ともいえるべらめえ口調の台詞が、律動を感じさせる調子良さをもって飛び出してくる」「意味の振幅をそのまま肉体化して、詩の空間を作っている」「語りの詩人鳴海の臨場感をもったこトバさばきの鮮やかさを見ることができる」。今ちょっとご紹介しただけで、だいたい鳴海英吉さんの詩はどういうものかというのはお分かりになると思うんです。

では、この鳴海英吉さんの「節」はいつ、どのようにして作られたかというのが今日のテーマです。そのためにはまず、鳴海さんがどういう生い立ちをしてきたか、というのが大変重要なことだろうと思うのですが、まず、生い立ちから考えてみたいと思います。

鳴海さんは一九二三(大正十二)年、東京の下町に生まれました。これは年譜では「上野動坂」と書いているんですが、動坂というのは駒込ですよ。だから多分あの辺も下町なんですね。ですからその辺で生まれた。そしてお父さんは、先ほど朝倉さんがご紹介したように加川榮一といまして、徳川夢声の先輩なんですね。だから上野とか深川の映画館で活弁をされて大変人気があったという方で、徳川夢声さんも、よく遊びに来て鳴海さんが可愛がられたということがあります。その後十代の前半になって、横浜へ引っ越すんです。これは、お父さんがやはり横浜の方の映画館の活弁を

やるようになって、横浜へ転勤する。ここでもやはり私は、いわゆる「浜っ子」といいますか横浜の語り口、浜っ子語り、これが?「下町で生まれ浜っ子まで育つ」といいますか、そういう環境が十代の前半に既にできていたと思います。そしてもう一つ重要なのは、十五歳から働き始めて鶴見で板金工を始めたんですね。そういうことで、工場労働者になった。そうすると働く者同士の会話などというのは鉄工所ですからね、だいたい荒いことばだろうと思うんですけど、そういうこともそこに加わるのではないかと思います。そしてもう一つはソ連、ロシアへ行って抑留されて、まあロシア語をさんざん聞いてきたんでしょう。ロシア語の影響があるかどうかは私は分かりませんが、多少ロシア訛りなんかもあるかも知れません。帰って来て二十五歳の時に土方与志の演劇学校に入ったんです。これは中央演劇学校といって、滝沢修さんと宇野重吉なんかが先生だったんですね。三島雅夫さんとか。ですから大変しっかりした演劇学校です。ここで鳴海さんは演劇の勉強を始める。そうすると鳴海さんの発声、声の出し方、これはやはり皆さん聴いていて分かったと思うんですけど、普通ではないですよ? やはりそういう素養、基礎がその時に作られている。そしてその演劇の基礎の上に「下町」、それから「浜っ子」、それから「労働者」ということばが起因してくる、それらがフュージョンされていく。?ということで鳴海節が形成されたのではないかなと思います。さらに後年三十八歳の時には、江戸時代に弾圧されていた日蓮宗不受不施派の研究を始めて、あちこちのお寺を回り始める。そしてそれに食らいついて、今度は仏教の勉強も始める。ということで、鳴海さんは御詠歌、念仏、それから民謡ですね。民謡については、私に時々電話がかかってきて「このところを教えてください」とか何か言って、ずいぶん民謡については「語りの民謡」とかそういうことを私に聞いてきたことがあります。しかしそこで仏教的な、先ほど申しましたような鳴海節の上に、もう一つ仏教の念仏の影響があると思います。そして鳴海さんのことば、いわゆるべらんめえ調の下町ことばというのは、いちいちご紹介する時間が今日はありませんけれども、読んでいただければ分かると思います。特に『風呂場で浪曲を…』、それから『裏声であいさつ』というのがあります。これはもう、完全な鳴海節ですね。そして『女友達』。八八年に出しているんですね。それから『念仏』という詩集があります。これはやはり、さらにそこに新しいリズムが生まれてきていると思いますね。それは鳴海さんがいわゆる書き言葉上の方法として技法として、それを使ったという、手として使ったのではない、やはりあくまでも鳴海さん本人の肉声ですね、もう肉体化されてしまっていて肉体の中から出てくることば、これが鳴海さんの詩であると思うんです。さらにもう一つ突っ込んで言いますと『ナホトカ集結地にて』、ここに鳴海さんの詩の方法というのがあるんですね。これは、「美学」と言うと鳴海さんはとても嫌がるかと思いますが、鳴海さんの美学を私はそこに見るんです。たとえば、そこだけちょっとご紹介したいと思うのですが。最初に出た『風呂場で浪曲を…』の中に抄として「ナホトカ集結地にて」がすでに入っているんです。それをちょっとご紹介します。一つは、書き出しの第一連ですね。これと終連。そこに非常に脚韻とかそういうものを集中させているんです。そこでまずリズムを作って最初に読者を引き込んで、そして最後にやはりそのリズムで終わるとか、そういう工夫がずいぶんあります。たとえば「菊の紋章」という詩があります。

「咸興 汗を流しながら燃え上っている」ということばが第一行に出ます。次にことばがあって酒を飲んでいる。「チビリ 呑む」、それから一行あって「チビリ 呑む」。「呑む」ということばがずっと出てきます。そこが第一連ですね。そして終連でやはり「チビリチビリ 呑む／呑む」ということばで終わるんですね。ですからこれなどはやはり、意識的なそういう使い方がこの詩の中にあった。頭の第一連と終わりの連、ここにリズムが非常に工夫して入れてある。これは非常に鳴海さんの作為的な方法ではないかなと思います。

そしてこの詩集についてたまたま私は、朝日(新聞)の編集委員をやっている方で早野透さんという方がいらっしゃるのですが、この方は朝日の「オピニオン」の欄でよく良い論説を書いていた人なんです。私は『鳴海英吉全詩集』をぜひ読んでもらいたいと思って送ったんですけど、そうしたら丁寧な返事が来ました。

《前略 座右に置いて繙いておりますと、力強く、心に迫ってくるものがあります。日本の歴史の体験者として雄大で細やかで、こんな 詩人がいたのだと感銘を受けました。背骨のような詩人と言ったら いいのでしょうか。》

?というような感想をもらったんです。「普段あまり詩を読んだことがない」とこの人は言っているんですけど、普段読んだことのない人がやはり鳴海さんの詩を読んでこういうことを感じたということ、これがとつても大きいと思うんです。ですから、おそらく鳴海さんのこの『風呂場で浪曲を…』もそうですが、読者は、私たちは、わりと詩人を意識して書いてしまうところがあります。ところが鳴海さんはそうではなくて、やはり職場で働いている仲間とか近所の爺さんとか、それから、たとえばいわゆる戦後、何と言うんですかああいう所は……赤線ということばは差別用語になるのかな、赤線、ではなくて米軍専用の売春宿があるんですね、慰安婦の。そういう所で働いている人たちに対して、ものすごく優しい眼を送っているんですね。そして彼女たちの苦しみを、やはり鳴海さん流のことばで書いている、代弁していくというかそういう詩があります。全集の中ではそれはわりと晩年に近い作品ですね。……そうですね、『女達の来歴』です。これは一九九八年。ですから亡くなる二年前ですね。この詩なんかは、ほんとにもう執念深くこの問題を追及してしまっていて、私家版で出しているのです。そして鳴海さんの詩をまとめますと、鳴海英吉の詩の方法とそのレトリック?五つあります。これは鳴海英吉の詩への結論ですね。ほんとうは詩を朗読しながらやれば良いのですが時間がありませんので。

- 一 独特のリズムと語り口。作者に固有の肉声が強く感じられる。
- 二 知的で澁刺とした想像力。状況の的確な把握と、そこから湧き出ることばによるリアルな描写。
- 三 何よりも骨の太い詩精神に溢れていること。そこに鋭いユーモア、深いアイロニー、しみじみとしたサタイアが見られる。
- 四 複雑で猥雑な内容を単純明快に表現すること。常に臨場感を持った語り口の迫力。
- 五 人間性、その詩精神のあたたかさ。机上のリアリズムではなく、あくまでも現場の庶民の感性の上に立脚している。

この一～五が、全て一体となって鳴海節がつくられていると言っていると思います。

お手元に配りましたのは私の詩ですが、これは墓詩銘、ボシメイ?本当は「墓碑銘」(ぼひめい)ですけども(笑)鳴海流に言いますと「ボシメイ」-「墓詩銘のブルース」です。これはだいたい八〇%が鳴海さんで、残りの二〇%が鳴海さんではありません。他の人も入れて書いております。それでこんな「し」と「ひ」の言い分けができない、これが鳴海さんのまた良いところで、東京に下町言葉があるんですね。岩波新書に『日本の方言』というのがありますが、「おしさま(お日様)」と言いますね、「し」と。これは中学校約二十八校で三百人の生徒を対象にした調査で、この柴田さんという著者が「おしさま」というのは山の手で二〇%、下町で四〇%。それから「おひさま」と正しく発音するのは山の手で七八%、下町で五五%くらいです。だから下町が圧倒的に「し」が多いんですね。だからこれも鳴海さんの詩そのものであります。それから、人のことを「し」と言います。これは山の手では三六%が「し」と言うけど、下町では五五%。それから「ひと」と発音するのは山の手では六三%、下町では四〇%。それから、火鉢のことを鳴海さんに言わせると「しばち」になる(笑)と思うんですね。これは山の手では一〇%しか「しばち」と言いません。他の九〇%は「ひばち」と言います。ところが下町に行くと、「しばち」と言うのは約六六%いて、「ひばち」と言う人はもう二〇%くらいしかないということになっています。「下町言葉」といっても共通語ではないんですね。東京方言、東京の中の地域方言だと。そこにべらんめえ調とか、活きの良い気っ風の良いことばとか、かっこ良いことばというのがあります。これは江戸にずっと連綿と続いている歌舞伎の荒事の影響もあるといえます。ですけど、それがヤクザとか露天商とか魚屋さん、八百屋さん、そういうところで受け継がれ、べらんめえ調になっている、庶民の話し言葉になっている。そこに鳴海さんは放り込まれて、そこで生きてきたということで、やはり鳴海さんの詩はほんとうに書き言葉ではなくて語り言葉、語りかけ、そういうものが基本にあったと思います。

そして、これは水崎野里子さんが第二回目の講演で話されたことですけど、鳴海さんの詩の演歌と国際性ということ、私は全く同感したのですが。今、世界とか日本の詩の中で鳴海さんの詩というのはどのような位置にあるかということを考えますと、ちょっと大きなことを言うようですが、私は民謡をたまたまやったもので、『万葉集』に東歌というのがあります。それから『古事記』とか『日本書紀』の中に民謡があります。それから、中世には『梁塵秘抄』というのがありますね。これも民謡がだいぶ入

っています。それから『閑吟集』というのは、中世の流行歌を集めたものです。近世になると、一七七二年に『山家鳥虫歌』があります。これは三百九十八首あるんですね。九州から東北まで諸国六十八カ国の民謡を集めたんです。これは画期的な本だと思います。おそらく江戸時代の『万葉集』だと思います。それで、たとえば菅江真澄さんなどは『ひなの一曲』といって東北だけの民謡を集めたものがあります。その他に播磨とか但馬とかそこだけの地域的な民謡集はありますが、今言いました『山家鳥虫歌』というのは日本全体を網羅して大変すばらしい。これは岩波文庫にありますので、ぜひお勧めしたいと思います。そういうものが連綿と流れてきている。歌謡、語り物ですね。それから琵琶法師とか瞽女さんとかそういう人たちが語り伝えてきている詩があるわけです。なかなかすばらしい詩があるんです。私は、先ほど朝倉さんがご紹介してくださりました深夜放送でそのことをちょっとテーマに話しているわけですけど。作家の五木寛之さんは「古代から中世・江戸時代へと連綿と続いているこの流れは、文化の深層海流だ」と言っているんですね。これが本当の日本の文化ではないかと。上澄みはたとえば『古今和歌集』とかがあります。貴族がつくった、そういう宮廷で生まれた文学とかはあります。でもそれは上澄みで、本当は文字も書けないような底辺の人たち、そういう階層の人たちが連綿と受け継いできた一民謡・浪曲・落語なんかもそうだと思いますね。それから、漫才もそうです。そういう語りの世界、それは「文化の深層海流」だというふうに大変上手いこと言ったなと思うんですけど。そういうところに鳴海さんの詩は入るのではないか、というのが私の結論です。

これには金沢のもう亡くなった国鉄の詩人浜口國雄さん、この人に「便所掃除」という詩があるんです。この一篇を読んでもいただくと、これは山田洋次の寅さんの映画の中で、夜間中学かなんかで松村達雄の先生がその詩を朗読しているところがありますけど。「便所掃除」というのは大変美しい詩ですね。花鳥風月をうたって「美しい」と言うのは当たり前かも知れませんが、便所掃除、便所をうたってこんなに美しい詩はありません。そういうところに、たとえば先ほど言った武力也さんの「バッチャノダダスコ」なんかもそうですね、武力也さんの仕事なんかもそこに入ると思います。そういうふうに文化の深層海流、そこに我々の現代詩がどう流れ込むか。流れ込まなきゃいけないというふうに私は思うのです。それを受け継ぎたいと願って今日はお話を終わります。(一同拍手)

朝倉宏哉 どうもありがとうございました。鳴海英吉さんの詩の庶民性とか大衆芸能性、リアルでユーモアがあり親しみやすく深い、そのへんのところを分かりやすく解明されたように思います。十一月二十三、二十四日の佐藤文夫さんの深夜放送がますます楽しみになってまいりました。

石村さんがお見えになったようです。どうもご苦労様です。

次は石村柳三さんに「鳴海英吉と石橋湛山」というテーマでお話いただきます。先ほど鈴木さんからちょっとお話がありましたように、石村さんはタベマでは非常にお元気だったのですが、そのあと足を挫かれましてちょっと歩けないような状態になりました。今日はぜひこの会のために何としてもお話をしたいし、我々もぜひ聴きたいということで、幕張からタクシーで駆けつけていただきました。どうも、今日はありがとうございます。(一同拍手)

石村さんは一昨年でしたか石橋湛山に関する著作『石橋湛山 信念を背負った言説』を刊行なさっておりまして、これが大変評判よろしく、日本図書館協会推薦図書にもなっております。石村さんはまず石橋湛山とどのへんに関係があるか。これは私の個人的な推測でございますけれども、石村さんは青森県のご出身ですが山梨県の仏教系の身延山高校から立正大学を卒業しています。石橋湛山は昭和二十七年から四十三年まで立正大学の学長をしていますので、在学時が一緒なわけです。また湛山はお父さんが僧籍だった関係で、少年時代を日蓮宗総本山身延山久遠寺で育ちました。甲府中学から早稲田大学哲学科を出て非常に哲学的な思索をしながら経済誌に勤務して先験的な経済評論家としても大を成した。そして戦後は政界に転じ、大蔵大臣を経て総理大臣まで上り詰めた方で、その途端に風邪を引き肺炎となりわずか二カ月かそこらで昭和三十二年二月、惜しまれながら退陣した。その引き際が非常に爽やかだったということで、語りぐさになっている方でございます。それから石村さんは鳴海英吉さんと「光芒」同人としての長いお付き合いがありまして、先ほどの佐藤さんの話にもありましたように、鳴海さんは日蓮宗の不受不施派の研究をしておりましたがその足跡を石村さんは立正大学その他に訪ねているわけです。そのへんのところをどのように鳴海英吉と石橋湛山を関係づけ、なおそのところにどのような意味を我々にもたらししてくれるか、大変楽しみでございます。どうも、今日はほんとうにご苦労様です。ひとつじっくりとお話ください。

「鳴海英吉と石橋湛山」 石村柳三

今日は鳴海英吉と石橋湛山ということで、結びつきがあるのかなという気もするのだけれど、(笑)何とか語ってみたい。

鳴海さんについては皆さんご存じだから詳しいことは申し上げませんが、加川治良という本名で立正大学に出入りしていて、『全集』の年譜によると立正大学に関係があるのは昭和三十八歳の時に不受不施派の大家であった宮崎英修先生に師事したということになっております。昭和三十七年というと、安保闘争の一年後ですね。立正大学というと、けっこう芳賀先生の方が私よりもよくご存じだと思いますけど、そもそもは日蓮宗の宗立大学としてできているものです。明治三十七年。大正十三年の旧制大学令によって大学となる。あの当時はそんなに日本で私立大学がなかったものですか。何しろ坊さん学校だったからなかなか経済学部とかそういうものが無いもので、大変だったみた

いですけど。現在は八学部の総合大学です。そういう関係で不受不施とかそういうのを研究するには立正大学に行かなきゃいかんということで、鳴海さんはどういつてか知らんけど、多分お寺の方から聞いて行ったんだろうと思います。そういう関係で立正大学との繋がりができました。

それで、石橋湛山という人は昭和二十七年に立正大学の学長となる。戦後大蔵大臣をやって、まもなく立正大学も新制大学として経済学部が昭和二十四年にでき、そのあと経営が苦しいということで石橋湛山を学長に迎えたということです。

石橋湛山という方は、ご存じのように早稲田の哲学科を出まして、まあ頭も良かった。一高を二回受けて二回とも落ちたとは言っていますが、東大に入るくらいの実力はあったみたいです。そういう関係で、早稲田の哲学科を出てから昔で言えば研究科、今で言えば大学院に、要するに学校が全部負担をして学んだ。普通だったら島村抱月なんかもそうですけど早稲田の教授のコースだったわけですよ。ところが湛山という人は、なかなか気骨がありすぎて、坪内逍遙なんかとちょっと合わなかったのではないかと言われている。それで結局、早稲田ではなくて東京毎日新聞、今の毎日新聞ではないけどそこで記者として島村抱月先生の推薦で入って、それで言論人としてジャーナリストとして歩むわけです。それから東京毎日新聞を辞めて、経済雑誌で日本を代表する「東洋経済新報」に入るわけです。最初は経済を知らない人だったのですが、語学ができたので全部原書で経済学を勉強して、電車の中で原書を読んだという話があるくらいです。それで苦労しながらも、当時の、戦前戦中の評論家としては日本ではピカイチの学者顔負けの経済評論家として活躍するわけです。有名な「金解禁問題」の論客として活躍した。ただそれだけでは大したことないのですが、日本の言論史上に不朽の足跡を残したことだ。その湛山の資料というのは『石橋湛山全集』十五巻。それが出版されてから皆びっくりしちやったんですね。有名な人だったことは有名だったのだけど、それが出てから竹内好とか家永三郎とか当時の知識人連中がもうびっくりしちやって、「えっ、こんな人がいたのか！」と。それも戦前から民主主義の、いわゆる戦後の民主主義の思想をずっと流れているものを主張してきたわけです。それで、政治家というよりもそういう言論人、とくに大日本主義を批判し、小日本主義を主張し、軍部や戦争を最後まで批判した信念の人だったということを覚えてもらいたい。

湛山の『石橋湛山日記』がみずす書房から五、六年前に出ましたけれど、それを読むと、やはり哲学科を出て宗教学を大学院で研究しているものだから、宗教とか仏教に関しては興味があるわけですから、立正大学の仏教研究会とか日蓮教学研究会にしょっちゅう出ていたわけです。それで鳴海さんが立正大学と関係を持った頃にはもう病に倒れて……ただ、鳴海さんに聞いてみないと湛山に会っているかどうかは分からないけど。そういう関係です。宮崎英修先生とか坂本幸男先生とかは当時の仏教関係者もしくは、宗教社会学の久保田正文先生は湛山の下で動いていた教授ですからいつも出会っていたらうけど、鳴海さんはどうなのかな、という気がします。

そういうわけで、鳴海さんはずっと宮崎英修博士の弟子として、また立正大学とは関係があった。私は不受不施派の研究を書くのに日蓮教学研究所を訪ねたことがあるんですが、「鳴海英吉」と言っても知らないんだよね。要するに、詩人だから。一切そういう関係に「鳴海」という名前を出してない。「加川治良です。本名は加川さんです」「あっ、あの加川先生ですか！」ということで、研究所でも一目置いておられるんですよ。それでそういう関係の有名な研究所の所員になっているわけだよね。普通専門の所員というのは、博士課程を出ても、なかなかない。宮崎英修先生の推薦があったからだろうと思いますけど。それが晩年まで続いたということで。鳴海さんがよく言っていたように、鈴木さんが『鳴海英吉全詩集』の解説で書いておりましたがそれでも「詩人として残らなくても不受不施派の研究家として残るだろう」と。それだけの仕事は研究家としていたと思います。そういう意味で、若い人たちなども「加川先生」です。「鳴海英吉」と言ったら、何者ですか？　というぐらいで。そういうことから仏教学部の研究所でも詩集を一冊くらいずつ買ってくれたみたいだけだね。ありがたいことです。

?こういう関係です。石橋湛山と関係があればあるということです。無ければ無いということなんですけど。まあそういうことで。ただ一つ簡単に言っておきたいのは、湛山先生も革新的で非常に進歩的な考えの持ち主で、鳴海さんという人はどちらかというと左翼というか非常に革新的なそういう共通す

るもの、そして同じ仏教徒であったということです。共通するものがあるんですよね、たとえば反骨精神とか。まあそういうところが非常に似ているのだと思います。

それから、これだけは言っておきたいのは、『鳴海英吉全詩集』の百四十四ページに、「馬」という詩があるんですよ。この中に「靖国神社」という靖国神社を批判している詩があるんです。最後の方は「靖国神社におれは死んでも行かない」。靖国神社に行くんだったら俺は「馬頭カンノン」になった方がいいということで批判しております。これと関連して石橋湛山も、戦後まもなく昭和二十年十月十三日の「東洋経済新報」の社説に「靖国神社廃止ノ議」という論文を書いているわけです。これは何年前に芳賀先生とちょっと話したら、連合国がそういう電波を出している、アンテナを出したというか、「武装解除だけではなくて精神的武装解除もしなければだめだ」ということで、それを連合国から言われているみたいで。ということはどういうことかという、要するに連合国が靖国とかそういう問題のことで批判しているわけです。それに湛山が応えたかどうか知りませんが、もともとそういう考えの方ですから戦後まもなく昭和二十年の十月に、八月に戦争が終わっているわけですから二カ月経たずに「靖国神社廃止ノ議」というその有名な論文を書いている。これは『湛山全集』の十三巻に収められております。この中で湛山は、「謹んで靖国神社を廃止し奉る」ということを言っているわけです。それも、筆をとっては黙考し、又思念し、決心をして書いた文章であったのだ。「靖国神社」という大きな問題をはらんでいた認識を持っていたから。要するに、靖国神社そのものを廃止しろと。それはなぜかという、何というか軍部とか戦争指導に荷担した人たちのね、お祀りする？。だからそういう人たちが靖国神社を崇めたててきたのだから、要するに「将来禍根を残すだろう」と。将来禍根を残すということは、二、三年前からああいう問題で、兵隊だけならいいけど戦争指導者まで祀りあげられるという、ちょっとこれは問題があるわけですよ。これは大変なもの。湛山はそれを予見して批判しているわけなんですよ。国民も戦争反対しない。みんな慣らされちゃって批判しない。そういう国民がいて、それは確かに戦争責任は国民にもあるかも知れないけれど、それを指導した戦争指導者たち、日本の指導者はもっと責任があるのだと。そこには当然格差があるのだということを言っているわけです。そういう人たちが行く行くは靖国神社を混乱させるだろうということを、これは予見している文章ですよ。そういう意味で考えても、靖国神社は廃止した方が禍根を残さずにすむのではないかと。もちろんそういう死んだ人を祀ることは大事だけど、それは靖国神社でなくとも何か作ってやればいいじゃないかという考えを、要するに六十年前に言っているわけですよ。それで現在、靖国神社問題のいろいろな書籍が出ていますが、ほとんど湛山のそういうものを引用していますね。だからそういう意味で、鳴海さんのこの「馬」というのを読んでいたら靖国神社批判の詩が出てきたので、ああ鳴海さんもやはりそういう、当然彼の考えでいけばそうだろうと思いました。そういうことが湛山と一致すれば一致するかなという考えでおります。

だいたいそんなところですが、あとは、鳴海英吉さんの『全詩集』を私は二回読んだのですが、その時の味読の最後にメモとして書いているのは「鳴海英吉の詩精神」ということで、この詩集にあるのは生き抜く力、たとえば「へんろみち」。これは芳賀先生が葉の中で「大衆のそういうものを背負っている詩だ」ということを言っていたけど、まさしくそれに通ずるものがあると思います。それから「みほとけの合掌」とか、あと、不受不施派の信仰にあるそこに見せたものは、やはり弱者としての生き抜く力を何というか信仰によって、不受不施派の人たちは救われる面があったのかも知れないと感じました。そこで鳴海英吉の『ナホトカ集結地にて』についても、ともかく生き抜くことだということでやはり力説している。それが鳴海英吉のこの詩集『ナホトカ集結地にて』の詩の根本を成すのではないかと思います。あれだけの中で、シベリヤでバタバタ死んでいく。死ぬ人を見てきた中で生き抜いてきた人たちがそういうものを書いたり残したりしていく。その仕事もやはり使命として鳴海さんは持っていたのではないかと思います。そういう意味でこの詩集は、一つのリアリズムを持った日本の詩壇の中には残る貴重な詩集だと思います。そういうことを感じております。鳴海さんが立正大学の宮崎英修先生に師事し不受不施派の研究をしたということは、そういう精神をますます強く感じただろうと思います。それがこの詩集にも現れているということをお伝えして、簡単ですがこれで終わりたいと思います。(一同拍手)

朝倉宏哉 どうもありがとうございました。鳴海さんの詩の根底にあるものは弱者の生き抜く力であるということ。それはシベリア抑留体験、ひいては日蓮宗不受不施派の研究からもたらされ、石橋湛山の批判精神と繋がるように伺いました。どうもありがとうございました。

次は、芳賀章内さんの「宗左近の詩的精神と縄文の精神性」でございます。

宗左近さんは、ご存じのように当市川市にずっと在住なさっておりまして、宗左近さんが何度かテレビで話したのを聞いたことがございますけど、「私は江戸川のほとりのマンションに住んでおりまして、天気の良い日には富士山から男体山まで見える。そういう所に住んでおります」と。惜しくも今年の六月二十日にお亡くなりになりました。去年、日本現代詩人会の詩祭の時に、先達詩人として顕彰されました。あの時は大変お元気ですばらしいメッセージをなさったわけですが、あれからわずか一年でお亡くなりになり、ほんとうに残念でございます。

宗左近さんは、ご存じのように有名な詩集がございます。『炎える母』。東京の空襲でお母さんの手を引いて逃げる途中、手を離してしまった。そのためにお母さんは焼死なさった。それからもう一つ有名なのは『縄文連禱』ですか。特に市川は縄文の遺跡の多い所であります。縄文研究をなされて縄文精神を自分の詩精神に生かしたといえますか、そういう詩集も幾つかございます。今日はその宗左近さんの詩の精神と縄文という、そこに焦点を置いてお話くださると思います。

芳賀さんは、鳴海さんとの関係で言いますと「鮫」の同人であったということと、この『鳴海英吉全詩集』を刊行なさった時の編集委員、それから今回第三回目を迎えていますですがずっとこの研究会には中心にご尽力をいただいている方でございます。ひとつよろしくお願いします。

「鮫の会」の芳賀章内と申します。(一同拍手)また、「鳴海英吉研究会」のひとりでもあります。まずは私の拙いお話をさせていただくに先立って、宗左近さんに心から哀悼の真を捧げます。宗さんの〈『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会〉(二〇〇三年四月五日)における講演『鳴海英吉における「国の記憶」』は、あとで振り返ってみても素晴らしい内容でした。鳴海英吉の心底を見事に掘り起こすとともに、それを通じて、今日における「詩とは何か」について語って下さいました。それは揺るぎない透徹した眼差で、ややもすれば厚い文明に麻痺されて、不透明に陥りがちな私などにとっては、目の洗われるお話であったのです。ここにそれを含め、膨大なお仕事を通じ、常に斯界のご指導をつづけて下さった宗さんに重ねて深く感謝いたします。

さて私はこのたび、この壮大なる宗さんの中心世界というべき縄文の詩とは何か、について語ることになりました。いや、実は私も若い頃(一九六五年前後)から縄文の世界に大きな関心をもっておりました。その関心を引き出したのが故岡本太郎さんの縄文の火焰土器の記述でした。私はそれを掲載した書名を忘れていますが、内容は鮮やかな記憶の裡にあります。端的に言えば、シュルレアリスムを何もフランス芸術界ばかりから学ばなくてもよい。日本にも縄文土器というのがある。たとえばその中の火焰土器の文様は、まさにシュルである、というような事だったのです。そこで私ははじめて実物を見ずに火焰土器という名前を憶えたのです。ヨーロッパにおける数々のアヴァンギャルドの運動が、私たちの日本歴史の根源にある縄文文化の時代と相似であるということは、何よりも若かった私を勇気づけ、興奮させたのです。そしてそのことによって私は岡本さんの数々の論文にも接しました。たとえば、『アヴァンギャルド芸術』『原色の呪文』という今日的芸術課題に関するもの、また現代芸術を刺戟するものとしての考古学的な世界の遺物、呪術、神話など超時空にかかわる分析論もありました。そのなかの一作「縄文土器 | 民族の生命力」は、先の火焰土器の話とは異なった論考でしたが、内容は縄文土器論を述べつつ、それを生み出した縄文時代の狩猟、漁労、採集を主体として生きていた縄文社会の様相にも触れていました。ちなみに縄文時代は紀元前一万年から紀元前三〇〇年ぐらいまで、紀元前三〇〇年からは農耕時代で米が中国大陸を経て伝えられたといわれる弥生時代が始まります。ですから縄文時代とは、日本歴史で判る最も古い時代ともいえます。ドングリやトチの実を食べ、魚や狩りをして生きていた時代です。縄文土器とはこのひとたちが作った縄目の文様を持った土器のことであることは、誰でも知っていることです。この土器の迫力について岡本さんは次のように述べています。

《縄文土器のもっとも大きな特徴である隆線紋は、はげしく、するどく、縦横に奔放に躍動し、くりひろげられます。その線をたどってゆくと、もつれては解け 混沌にしずみ、忽然と現われ、あらゆるアクシデントをぐりぬけて、無限に回帰しのがれてゆく。(中 略)いったいこのような反美学的な、無意味な、しかも見る者の心情を根底からすくいあげひっくりかえす、とてつもない美学が、世界の美術史を通じて見られるでしょうか》

これほどの感激だったのです。これを岡本さんが発表したのは一九五二(昭和二十七年)年、戦後間もなくのことです。そして宗さんは、といえば、宗さんが縄文土器と遭遇するのは、それから十余年後の一九六五(昭和四十)年です。それについて宗さんは次のように記しています。

《昭和四十年の春、わたしのテーブルの上に縄文土器深鉢が据えられました。高さ四十センチで横幅が四十五センチの、雄渾な動力学と 清澄な静力学の構成する、断乎として壮絶な、雄品です。

それを見つめて、わたしのなかの死者たちが戦きました。何分間 も戦き続けました。思わずわたしは悲鳴をあげました》

(宗左近「超時空」)

この中の死者たちとは、宗さんが一生、罪として背負いつづけた詩集『炎える母』の主人公、あの東京大空襲の極限状況のなかで手を離してしまったお母さんと、応召により戦死した四人の親友のことです。自分だけ生きていることの負目の深い罪疚感で重苦しく生きてきた宗さんを、この縄文土器は救ったのです。ですから宗さんは以後、縄文土器、いや縄文文化とともに生きつづけたのです。

その縄文世界の理解に関して何よりも大きな力となったのは、やはり岡本さんの数々の縄文文化論であったのです。宗さんがお書きになっているように、縄文土器を美学として捉え、それを社会に訴えつづけていたのが、岡本太郎さんでした。岡本さんの美学は、今日よく語られる「芸術のための芸術」ではなく、生きる方法と密接に結びついた「モリモリした生命力」であるべき、という主張でした。それは縄文人の「超自然的な世界とのほげしい交渉の上に成り立って」いるもので、呪術的であり、その縄文人の精神の起伏が、縄文土器の文様になっているのだといいます。このように岡本さんは客観的で認識的であります。これに対して宗さんがきわめて主体的行動的認識であることは、先ほどの初めて縄文土器に接した驚きの表現でわかります。「わたしのなかの死者たちが戦きました。何分間も戦き」「わたしは悲鳴をあげ」という事実からです。

この風景をどう思いますか。この心性はまさに岡本さんのいう縄文人と同じく、超自然的な世界との交渉の上に成立していることばのように思われます。

宗さんは学者です。学問は科学です。考古学は分類すれば、人文科学系の中の一系統です。宗さんが昭和四十年以降、縄文文化の研究を深めていったことは、その後の著作物『私の縄文美術鑑賞』『縄文物語』などで判ります。しかし何よりも特筆すべきことは、縄文を謳った詩集が二十冊を超えるという事実であります。加えて実際に縄文遺物も研究資料として膨大に収集、後には宮城県加美町に寄贈、縄文芸術館をオープンさせるほどの貢献をしていることから明らかです。その学者が、縄文人の心性と同等のレベルに立ち、何千年の時間差を、今、にしてしまうその魅力とは。宗さんはこう語ります。

《縄文深鉢の雄品、これは、動力学と静力学の激突と融和の、背反と 統合の、不思議に柔軟で奇妙に強靱な、動きやまない静止体です。強 大な矛盾の統合体です。そして、したたかにしなやかな運動を行なっているものです。》(前出・「超時空」)

宗さんも岡本さんも、縄文土器に見た第一の共通性は、縄文が放つ奇怪な造型と文様の運動性です。なぜそれを感じたのか。ひどく単純です。あらゆる科学的研究、合理的知識に囲まれながらも、それを超えて、そこに存在するもの同士としての対話ができるからです。縄文土器と裸の付き合いができるからです。いまそこで親友に会ったかのように無意識に話せるひとが、詩人というべきでしょうか。私たちはしばしば、すべてひとは詩人です?という声を聞きます。しかしややもすれば、現実の制度や合理的な知識や物理的時間認識に縛られて、本来の自由な意識がそれらに拘い取られてしまいがちなのです。それでは縄文との対話はできません。

宗さんは、記憶の現実的存在も主張しているのです。亡くなった母と四人の親友は、宗さんと今の現実的時間を共有している。だから一緒に縄文土器を見て驚いたのです。単なる回想というのは死

者(過去)の風景の再現です。しかしここでは生き生きとした生者であり宗さんとともに感動の極地にいるのです。あり得ないことがあり得る。まさに分析心理学者カール・グスタフ・ユングの普遍的無意識や元型論などに繋がり得る心の風景ともいえるほどです。この観点から見るとき、私は宗さんのきわめて鋭敏な感性を感じないわけにはゆきません。宗さんは、死んだ母と友人たちの夢の充足とその実現を、縄文土器が現わす縄文人の生命をかけた強烈な運動の造形性のなかに、読み取ったのでした。

縄文観の拡張

作品を読みたいと思います。作品の選出は、思潮社の現代詩文庫No.127『続・宗左近詩集』からです。この詩集は《縄文》《風文》《夕映連禱》《縄文連禱》《新縄文》の五詩集から抽出された作品で構成されています。あたかも縄文特集を思わせる一冊で、寺田透、那珂太郎、佐伯彰一各氏の解説付きで、これを読んでいただくとさまざまな宗さんの詩的表情がわかるように思います。詩集《縄文連禱》からの一作です。

狩猟

熊

遠くの匂いを嗅ぎつけた

だから きみたちの
投げる石を避けなかった

鹿

遠くの音を聴きつけた

だから きみたちの
射る矢から逃げなかった

樹

遠くの風を感じつけた

だから きみたちの列を
黙って見送った

きみたち

遠くの光がまぶしかった

きみたち 祈りを食べるように
肉を食べた

悲しかった
おいしかった

だから 信じた いつかきみたちの肉が
悲しくおいしく食べられるのを

深い愛を感じさせる作品です。縄文人にとって狩りは、危険を伴いながらも為さなければならない宿命的仕事です。大事な食料の獲得です。現代は、縄文中期(前二〇〇〇年_三〇〇〇年)には農耕が行われたといわれているようですが、まだ次の弥生時代のように本格的に全国的規模に広がっていたとは思われません。ですからまだ狩猟は、漁労・採集と並んで縄文人の生命を支える三大仕

事の一つだったことは間違いありません。

エコサイクルということばがあります。生き物はすべて「食う、食われる」の関係の中にあるということの意味だそうです。宗さんはこの認識の上にたっています。この作品に登場する動物、熊も鹿も樹もすべて人間に食べられることを知っており、彼らは、自ら命を差し出しているのです。だから人間は、「祈りを食べるように／肉を食べた」のです。殺すことは「悲しかった」が、食べてみると「おいしかった」のです。作品の結びは、こんどは人間が、何ものかにその命を「悲しくおいしく食べられるのを」信じるのだ、と謳っているのです。喜びと悲しみ、生と死の緊張性の中に生きた縄文人を慈しみつつ、人間も皆、同じ宿命の中にあり、その不条理を覚悟して引受ける大きな愛を、自らのの中に感じているのです。

宗さんはこの詩集《縄文連祷》において、今日の考古学を通じて復原できる縄文社会のさまざまなテーマを正面から取り上げています。先ほど申し上げた縄文人が生命を支える三大仕事といった狩猟の他の、漁労と採集についても、それぞれを主題として謳っています。縄文人とともに夢を育もうとしているかのように。「縄文火焰太鼓」「縄文宇宙太鼓」「縄文未来太鼓」などの作品がそれです。縄文人が幸せを願って燃えている心、未来に広がる夢の死者、死者の夢を偲んで太鼓が鳴り渡ります。太鼓の音が重ねられていくリズムの中に、燃える縄文人の心に合わせて楽しく、宗さんも躍ります。それでは作品「縄文火焰太鼓」を読みます。

縄文 雷 縄文 稲妻

ああ 世界

引き裂かないなら 愛ではない

縄文 火の雲 縄文 雲の火

ああ 世界

滾らないなら 恋ではない

縄文 朝焼け 縄文 夕焼け

ああ 地球

煌めかないなら 生命ではない

縄文 焰の波 縄文 波の焰

ああ 地球

吊りあげないなら 祈りではない

縄文 渦巻き 縄文 竜巻き

ああ 宇宙

取り憑かないなら 魂ではない

縄文 きみたち 縄文 ぼくたち

ああ みんな

燃えあわないなら 夢ではない

縄文 日本の日本 縄文 宇宙の宇宙

おお 火焰

縄文 縄文 縄文 縄文

この縄文の時代に太鼓があったかという、現在のところ決め手とされる遺物は発掘されていないようです。縄文鼓とも呼ばれている有孔鐃付土器がありますが、種子壺や醸造器などという意見もあり、定説をみません。しかし縄文の音楽を太鼓説でくくってみる宗さんの着眼は楽しい。必ず縄文時代には、音楽は存在したと思います。縄文人の心意気のリズムを太鼓に合わせる。詩文は日本語では一番基本とされる二音一音節のリズムを繰り返している。太鼓のリズムにぴったりです。まさしく常民のリズムです。宗さんは作詞家としても、作曲家三善晃さんと組んで、多くの作詞を残されているといわれますが、この作品のリズムからも、十分に納得ができます。とにかく宗さんの縄文時代の知識は、考古学者も顔負けの、独自の文化論を展開するほどでした(『縄文物語』)。当然、遺物研究も時代的・個別的に体系的精緻を加えていきました。詩作品の中に遺物しての土偶や石棒などがでてきます。土偶もまた、想像を超えた造形性をみせます。おそらくこれも、ヨーロッパのアヴァンギャルド芸術をも凌駕する衝撃を与えます。いずれも祭器で呪術に関係する遺物と推定されていますが、宗さんにとってこの造形性の発光する禱りの激しさが、自分の母や親友への禱りの深い思いと重なって、多様な作品を生みだすのです。「きみたち行進する／土偶たち行進する」あるいは「土偶たち行進する／おれたち行進する」などと謳う「行進」(詩集『縄文』所載)という作品がありますが、これなどは、もはや縄文は、宗さんの生命と一体になった趣きがあります。その感性が〈縄文連禱〉という題名の詩集を作り出したのだと思います。〈連禱〉ということばは辞書『広辞苑』には載っていませんでした。宗さんの造語ということになりましょうか。しかし意味は誰にも判ります。縄文人の禱りと自分たちの禱りが、地続きだといっているのです。

それを基層とした感性が、一九九〇年度ノーベル賞受賞のメキシコ詩人オクタビオ・パスの述べたことば《詩は国の記憶である》と結びつけたのです。宗さんはこのことばを、自分の個別的体験としての縄文世界を、普遍化し、概念化し、一般化するのに活用したのです。《国の記憶》の、国という英語のことばcountryの訳語を故郷(前出「超時空」)としたのも、魂の故郷の世界、心の中心の世界、人間の存在論へと上昇させその世界を開けます。そして故郷は存在として記憶化されて、未来になっても語られる価値と生命力を保つのです。その運動性こそが美学的世界を誘出し詩論を生んだのです。宗さんは〈『鳴海英吉全詩集』刊行を祝う会〉の講演《鳴海英吉における「国の記憶」》の中で、次のように、詩とは何か、について纏めてみせたのです。

《詩は、宇宙の創生と消滅との、そしてそもそもの生命の誕生と死亡 との、その双方の同時記憶の喚起のことである》

ここにおける宇宙とは、一方では何物も包摂する広大な宇宙であり、他方では謳う主題の全存在を意味しています。生きとし生けるものの存在とは生の中に死を含み、誕生すれば死を約束されており、初めがあれば終わりが内在されているのが本質なのです。当然、大宇宙・小宇宙の関係はあり、根底では切り離せないことは自明です。

宇宙観と表現

作品「縄文連禱」の一部を引用します。宗さんの作品は、謳いつつ追求する形を取るものが多いので、長編詩にならざるを得ない一面があります。詩的言語は、イメージを重ねつつ、感性の弁証法とといった趣きで、衝突し、うねり、溢れ、しかし最後は、みごとな統制を見せるのです。読んでみます。

縄文連禱

いま ゆらめいている

宇宙の琥珀

夕映えの奥に

天使の涙よりもきらめいて

吸いこまれてゆく死者たち

縄文の若者たち

この世の果てのむこうの焔の赤さを

誰よりも初めて見たために 曙を貰いて

燃えあがらねばならなかった友だち

この世の闇のなかにあの世の夕焼けの火を

何よりも早く点けたために

真昼に焼かれねばならなかった透明の青春

わたしたちの瞳のなかから出ていって

どこまでも明るんでゆく光たち ああ

さようなら

きみたち 愛 夜の裏への 流れ星

さようなら

きみたち 夢 時間の外への 流れ星

もう 凝えてくる

宇宙の瑤瑤

夕映えの奥に

天使の涙よりも青ざめて

死んで死なないでいる死者たち

消えた縄文の消えない若者たち

この世の始まりのむこうの生命の赤さを

誰よりも初めて抱いたために 血を噴いて

爆けねばならなかった友だち

この世の闇のなかに前の世の銀河の灯りを

何よりも早く点けたために

夜から凍らされねばならなかった氷柱の青春

わたしたちの瞳にまたたきを刻んだまま

どこまでも光ってゆく光たち ああ

さようなら

友だち 悲しみ 永遠の外への 渡り鳥

さようなら

友だち 祈り 大空の裏への 渡り鳥

(以下略)

宗さんが縄文人と一体であるという把握はその宇宙観も縄文人と同様であるといえます。だから「縄文の若者たち」と「燃えあがらねばならなかった友人たち」が同じように「どこまでも光ってゆく光たち」と化して、わたしたちを照らすことができるのです。神観念も現代人との間に類似性を捉えます。縄文時代とは大・小部族の乱立する国が成立する以前の時代。にもかかわらず縄文が日本全国に普及しているのは、単なる部族の持つ呪術世界ではなく、それを超えた大きな宗教性が全国を横断していたからだということです。それは現代日本人が臍に持つ神観念「自然と人間を産んだ、大へん巨きな存在」(宗左近『縄文物語』)を神とする一般通念に共通と見ます。

またこの作品にでてくる「愛」も縄文人と共有しています。宗さんは、自然の秩序の恩恵のなかで、自然を超える大きな力に感謝しつつ生きている縄文人は、「愛」に溢れていると信じているのです。縄文人の次にやってきた弥生人は、農耕という自然に手を加えて生きていく知の人、つまり文明人であると、宗さんは考えるのです。私が先に深層心理学者ユングの普遍的無意識あるいは集会的無意識の世界を含んでいるといったのは、そういう体験を超えた世界を実感できる意識を指しているのです。こういう感性が、詩作に繋がるのはどういう心の位置に立つときか、宗さんは亡くなった母や友人、縄文人を心底においてこういます。

《鎮魂とは「安らかにお休み下さい。誤ちは二度と繰り返しませんか ら」と祈ることではない。さまよっているタマシイの辿りつく肉体 を、新しく創って差し出すことである。この肉体とは、生の営みのこと、つまり広くは生活の現場、狭くは詩を含む芸術のこと、である》

(宗左近「昭和を読む」)

宗さんは戦死者を靖国神社に祀っても、戦死者は救われない、といっているようです。鎮魂とは私たちの生活の現場に彼らを生かすことの中にある。芸術家ならば芸術作品を作ることもある、と述べたのです。そうすることで縄文人と戦死者といま生きている私たちが詩の中に出てくる「愛」と「夢」を抱擁する真の存在者になると、この作品「縄文連禱」は謳っているのです。

もう一作、詩集『夕映え連禱』の中から、私の好きな作品の一部を読ませていただきます。

挽歌を拒んで挽歌

羊歯

遠い昔 海の闇から 濡れて歩き出て

近い今 土にすがりついて 乾いている

死者のなれの果ての生者

死者から死産された生者

羊歯

花を咲かせない

実を結ばない

笑わない

泣かない

羊 歯

愛を葬りつくさなかったものが
どうして自分の遺骸になりえようか

希望を貪りつくさなかったものが
どうして自分の柩になりえようか

羊 歯

優しい非情
むしりとられても

艶やかな残酷
ふみつぶされても (以下略)

花の咲かない羊歯、生きた化石ともいわれる羊歯に、自分を重ねているのです。寺田透さんに、次々とことばを「裏返し腹合せ」する技法は「直覚を阻んでやまない」(「現代文庫No.127」・解説文)といわしめた、宗左近詩の特色とする言語運動も見られます。たとえばその一例が「死者のなれの果ての生者／死者から死産された生者」というような表現です。意味は、決して花(希望・夢)の咲かない死者のような羊歯、そのような羊歯から、また死者のような運命をもって生まれてくる羊歯、ということになりましょうか。この「裏返し腹合せ」の言語運動こそ、先に述べてきた宗さんの「動力学と静力学の激突」「宇宙の創生と消滅、生命の誕生と死亡、その双方の同時記憶の喚起」という、きわめて重大な存在論的詩的表現法なのです。「同時記憶」という世界を、どのような言語空間によって示することができるか。ことばは通常、線条性(ことばを時間の中で条のように並べること)という宿命を持っている。そのことばでどのように表現すれば、一体的感性空間を創出できるか、と考えた表現法に違いないのです。いわゆることばの既成通念を破り未知の領域を獲得しようとするアヴァンギャルドの精神に基づくものといえましょう。実のところ宗さんはアヴァンギャルド、つまり前衛芸術精神に溢れているのです。近くは、鳴海全詩集祝賀会講演の中で、情熱を込めて語られた多くの詩人、画家などの紹介を見ても明らかです。アンドレ・ブルトン、パブロ・ピカソ、ジュール・シュペルヴィエル、ジャクソン・ポロックは、すべてアヴァンギャルドです。キュビズム、シュルレアリスム、アメリカの抽象表現主義の旗手たちです。また宗さんの多数の美術評論書、たとえばその中の一冊『私の西欧美術ガイド』を開いても、そこで語られた画家、彫刻家の大半は、アヴァンギャルドの芸術家でした。つまり宗さんの精神環境は東京大学で哲学を学び、西洋美術にも深く親しんできたその眼をもって、日本帰りをしたといえるのです。ピカソなどのキュビストが、未開社会の彫刻から、今日の硬直した伝統美意識を打破するヒントを得たように、宗さんは縄文土器を通して、現代詩の革新を計ったといえます。しかも宗さんは、芸術美だけではなく、日本人の思想までも掘り起こしたのです。もっとも伝統的無意識を、今日的存在論的認識に変革するなかに、詩的創造を企てたのでした。第二次大戦後、深いニヒリズムに陥った(前出・「昭和を読む」)宗さんは、縄文土器を通して縄文人から、人間として最高の愛と夢の回復する感動の世界を受け取ったのでした。それは、現代科学文明の限りない強化統制の下で、反比例して抑圧され矮小化される人間性、それを日常から解放させ存在価値に生きることを、宗さんは示唆されたのだ、ということができましよう。宗さんにとって何よりも縄文だったということは重要です。日本では人間がその手をほとんど自然に加えず、自然の恩恵に包まれていた最後の時代が縄文時代であったからです。自然のなかで裸の心で生きることができ、自然とともにさらに超自然の恩恵を意識することができた。そこは人間にとって無限の価値を生み出す、無限に自由な心の中です。宗さんが、一生、縄文に生きた理由がそこにあり、その身体的思想の響きが、感動的に詩法に反映

しているのが、宗さんの詩の世界であるように思います。

* *

これをもって私の話を終わらせていただきますが、最後に、宗さんがわれらの鳴海さんの詩集『定本ナホトカ集結地にて』の中で一番好きだったといわれた作品「雲」という詩があるんです。これはほんとうに明らかに「生」と「死」が一緒に同居している。いわば、非常に簡単に面白くない言い方をすると「半死半生の存在」というようなことが謳われている詩なのです。死んでいながら生きていて、生きていながら死んでいるというその世界を鳴海さんは「雲」という作品で書かれた。しかしそれを宗さんが一番好きだったというところがきわめておもしろいと、私は最後に皆さんに申し上げて終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(一同拍手)

朝倉宏哉 どうもありがとうございました。「宗左近の詩的精神と縄文の精神性」ということで、非常に緻密な考察で展開されました。これから宗さんの詩を読む時も、あるいは縄文の土器を見る時も、今までとは全く違った眼で読み、見ることができるのだと思います。新しい視点を頂きました。今のお話は「COAL SACK」に載録されますので、これを二度も三度も読みながら今のお話を反芻していきたいと思っております。どうもありがとうございました。(一同拍手)

鈴木比佐雄 五分休憩してそのあとスピーチと朗読を一時間くらいやりまして、三部ではシンポジウムをやりたいと思います。そのあと二次会を、宗左近さんとも親しかった女性がいましてね、その方が勤めていた料亭があるんですよ。そこで千八百円くらいの、会席料理ではないですが、隠れ家的な所がありますのでその料理をつまみながらちょっとお酒か飲み物をとと思っています。もし参加される方がいましたらばできるだけ参加して欲しいのですが、ちょっと人数を確認しておきたいのですが。どうですか？ …(人数計測)…

私はその女性の方からいろいろ話してもらおうかと思ったのですが、ちょっと二、三日前に電話が掛かってきて今日はいないので残念なのですが。聞いた話では宗先生は最期まで毅然としていて、「もうこんな偽物の葉は要らない。自分は本来的な世界に行くのだ」というような意味のことを話していたらしいです。そして不安の中にも超然としていたということは聞いています。宗先生は言葉を求められとよくお書きになったのは、「さようならは ない」ということばでした。それは、先ほど芳賀さんがおっしゃっていた「記憶の現実的時間」というのですか、生者も死者も一緒になっているような、そんな時間のことをいつも想起し考えていたような思いがします。

◎第二部 スピーチと鳴海英吉の詩を朗読／3時 30分～5時

葛原りょう、尾内達也、遠山信男、
岡山晴彦、水崎野里子

【第二部 スピーチと鳴海英吉の詩を朗読】

鈴木比佐雄 それでは、スピーチと鳴海さんの詩の朗読をしていきたいと思います。気楽に語っていただいて、あとは自分の好きな詩を朗読していただきたいと思います。

それと、ちょっと始まる前に先ほどの感想をお伝えしたいのですが。私は今日、千葉の柏から松戸に出てそれでバスで市川に来了のですが、そのバスの中で今の季節ですと山茶花をけっこう見かけたのですが。私が一九八七年に「COAL SACK」を始めた時に鳴海さんを誘って、鳴海さんは創刊号かその次の号頃に「さざんか」という詩を寄稿してくれたんですね。鳴海さんは花が好きで、特に山茶花が好きだったのかなあと思うんです。「さざんか」という詩も二篇ほど書いていると思います。その詩が載っているのは「花づくし」という詩で、十二カ月を連作し、一月がその「さざんか」だったと思います。今の十一月は「菊」という花の名前で詩を書いていると思いますけど。鳴海さんの家というのは、奥さんの実家に建てられた平屋建てのほんとうに小さな家だったのですが、その前は、鳴海さんは「雑草園」などと言っていますが、野草を収集してそれを可愛がっていたんです。それは見事な野草園でした。そういう美意識を持った方で、それを自宅の前で分けていたりとか周りの人たちに配っていました。先ほど佐藤さんのおっしゃっていた「文化の深層海流」というのですが、まさに鳴海さんはそういうところがあって、そのあたりは鳴海さんが今後ますます評価されて、私は日本を超えて世界に発信できる詩人ではないかと思っています。そういう意味で、佐藤さんの先ほどの講演というのは、非常に貴重な講演だと思っています。佐藤さんのことに関しては、鳴海さんは「佐藤文夫は、もしかしたら天下を取るかも知れない」と私に言ったことがありました。その時私は佐藤さんと会ったこともなければ、話したこともなければ、詩も読んでなかったのですが、それは多分佐藤さんの民謡研究とかそういうことを踏まえてそういう発言をされたのかなあと思います。私は『鳴海英吉全詩集』をつくりたいと思った時は、そういう鳴海さんからいろんな人の話を聞いていて、八七年からずっと十数年一緒に酒を飲んだりして話していろいろな人の話が頭に残っていて、鳴海さんの周りには素晴らしい詩人がいるってということが分かっていたんですね。だから、そういう方たちがきっと応援してくれるはずだ、ということでこの『全詩集』が実現したんです。

その一人の中で？石村さんなのですが、石村さんは実は膨大な詩論を書いています、コールサック社で実は今、私の『詩論集』のあとに第二の詩論集ということで、石村さんの詩論集をつくっています。それを発行するのを非常に楽しみにしているのですが。それはものすごい膨大なものですし、先ほどの講演の中にもありましたけれども仏教関係にすごく造詣が深い方なので、特に法華経とか浄土真宗だとかそういうことも深いので、そういうものが詩論の中に現れています。あと、インドのこともとてもすごく詳しいんです。アジア的なものもよく分かっているということもあります。そういう意味では今日の講演もまた一つのヒントになるのではないかと思うのですが。先ほどおっしゃっていた「弱者として生きる反骨精神」といいますか、そういうものが鳴海さんの中にあるって、でもそれはすごい強さだ

なあと思うんですね。

最後に芳賀さんの感想ですが、芳賀さんとは鳴海さんが倒れたあとに何回か二人で鳴海さんを訪ねまして、その時に「ああ、芳賀さんは鳴海さんをほんとうに尊敬していて愛しているんだなあ」と感じました。そういう意味で、鳴海英吉研究会の中でも柱になってくださって、ほんとうにありがたいと思っています。あと、宗先生のことも、先ほど言った「記憶の現実的時間」ということもまさにズバリ本質を衝いていると思うんです。そういうことも含めて、今回の研究会は出版記念会を含めて四回目ですが、今後はやはり鳴海さんと関係の深い方に深い研究発表といいますが、そういうような場になりたいと思っています。今後もよろしくお願いします。

それではスピーチと朗読ということで、一番目に葛原りょうさん。葛原さんはもう二回も朗読してくれています。よろしくお願いします。あつ、昨年詩集を出しています。

葛原りょう ああそうですね。『朝のワーク』という詩集を青肆青樹社から出しまして、何とか、いっぱいいいんですけど……。 (笑)

◇葛原りょう

前回から鳴海さんのこの研究会に出ていまして、いろいろと鳴海さんの詩に接するようになったのですが、何ていうか、「鳴海さん」というふうに、会ったこともないのに呼びたくなってしまうような親しさを詩を読んだ瞬間から持ちまして、またそういう人というのは愛されるような詩人でもあるし、自分もそういうふうに愛されたいと思ったりしているのですが。そうするためにはやはり愛があふれる、こちらから与えるような、与えるというか詩の中にはち切れんばかりの情のあるものを込めたものを書かなければならないなと思っています。ちょっと今まで悲観的なものが多かったので、私は非常に勉強になったというふうな感じがありましたね。去年からほんとうに良い経験をしていると思っています。

鳴海さんには出会えなかったのですけれど、私はほんとうにすれ違っていますね。川崎洋さんが亡くなられて、木島始さんや石垣りんさんが亡くなられて、お会いできた可能性のある方々とほとんどすれ違ってしましまして、それはちょっと残念なんですけど。でも、やはり作品の中で出会えるというのはありますし、いつでもこういうふうに読んで味わうことができるのは幸せなことだと思っています。

鳴海さんの詩は、朗読者にとっては朗読しがいがあるというか、生活者そのもののことばでもありますし、ロシア語が混ざっていたり、念仏が混ざっていたり非常に手強い。だから、今日も特に何を朗読しようかなんて全く決めてない。ちょっとペラペラめくって気になるものを朗読しようかなと思っていますけれど。ほんとうに朗読しがいがあるなと思っています。特に宮沢賢治も非常に私は好きで、「dah-dah-sko-dah-dah」とかすぐ朗読したい詩人の一人なんですけど。そういう系譜で繋がるかなという感じがします。やはり宮沢賢治から鳴海英吉、そういう側の列に私も立ちたいというか、そういう立場で書きたい。

「農民の手」「板金工の手」というのを持ちたいと思ってまして、実はつい一カ月半くらい前に清掃業の仕事につきまして。それまでフラフラしていたんですけど、それじゃいけないよと鈴木比佐雄さんからもお叱りを頂戴して……。 (笑)。あとは新川和江さんも同じようなことを仰って「生活も大事だから。詩人だけ、詩だけが全てになったらもうおしまいよ」と言われましたので。仕事を持つようになって朝八時前に会社にもう行って、夜遅くまで平日びっしり仕事をして、ウォッシャーとかデッキブラシとかを持つようになりまして、豆ができて、ほんとうにその点では自分は家がブチブルの環境だったので「農民の手」「板金工の手」という労働者の手は遠かったんですけど、自分はとにかく昔から憧れていまして、今はいろんな薬品を使っているからボロボロになっちゃっているけど、そういう手を持つことができたのはちょっとうれしいなあと、密かに思っています。(声援と拍手)

それで、やはり鳴海さんが酒が好きだということで、自分も酒が大好きなんですけど、山頭火とか放載も好きなのですが、昨日は一カ月半で会社の歓迎会がありまして、ちょっと大手町で飲んでまして、歓迎会をしてくれてうれしかったです。そういうのも初めての経験で。それで飲んでいたら上野まで飲み歩いて、私は上野に住んでいるので電車に乗る必要ないのに、なぜか電車に乗ってしましまして、大宮行き最終電車に乗ったんです、昨夜。(笑) 気がついたら浦和をとくに過ぎていて、ショックを受けましてね、ちょっと朝日を浴びて帰ることになっちゃったんですけど。ほんとうに久しぶりに

昨夜は飲んでしまつて。でも、鳴海さんとも飲みたかつたというのは前回も言いましたけど、ほんとうに自分にとっては「鳴海さん、鳴海さん」と何か言い寄りたいような、そういう存在です。

そういう詩人の朗読するのはやはり武力也さんとかがいろいろと導いてくれたというのがありまして、多分ここに来ることになったのも武力也さんの存在が強かつたのではないかと思っています。非常にいろんな人との出会いが、コールサック社にも出会えて、これからどんどん拡がってゆくのかなと感じます。

では、ちょっとペラペラっと朗読をします。まだ決めてないのですが、さっきお酒の話をしたから……。

二合の酒

二合の酒を呑むのである

たかが 二合の酒を

おれ 正座して呑むのである

神に見立てまつるものを ここに置き

こころ 静かに 呑むのである

榊の葉 酒にひたし

すこし熱カンにして 呑むのである

失業中の正月

可哀そうだと カミさんが

二合の酒を都合してくると

オミキです と言った

おれの家には 神棚がないから

おれが 恐れ多いけれど神さまになって

そのオミキ いただくことにする

唱えよ べろべろ祭文がたり

おれ むれ わかれ はなれ やつれ よごれ

くずれ ちぎれ みだれ ながれ ながれ ながれ

よいどれ たわむれ ずぶぬれ つかれ まみれ

あぶれ ゆれ ゆきだおれ……

カミさん

れの字には 反逆のきざしがみえる

なみだ 左右にふりわけ

カミさん うんうん うなずき

シチューのじゃがいも おれの皿に盛り

スープだけ すするのである

カミさん もう語るな

秋・念仏

*ぎやていぎやてい はらぎやてい

はらそうぎやてい ぼうじそわか*

ちいーん

あんなあ ぎやていぎやていって

なんだっぺ おめえさん判るけ?

解説したくなつたが やめる

おまじないと 同じだっぺ

そんなもんだべ

念仏堂に 仏様が欲しいと
じいさん ばあさん
へそくり集めて買う
この仏様 安かった
あみだ仏を買ってきた
あれっ 宗旨違い
云いかけたが やめた
安い方で よかつぺ

仏さんも云うていなさった
念仏 題目 おれの知ったことか
おまいら 好きに死んでくれ
おれも せいせいする

あーあ
はんにゃ はたみた へそみた
しょうがないから したもみた
色即是空 空即是色……………
おれ 大きな声で唱和する
ちいーん
大きな大きな 秋の月
つまらん浮き世に にゅっと出た
勢いあまって 酔っぱらいのおれ
鐘を叩きながら つけ加えた
仏さん遊ぼっ……………

どこを開いても朗読したくなくなっちゃいますよね。(笑)やはりことばと詩の、詩人というか詩人の意識よりも近いんですね、距離がなくなってしまう。やはり書き言葉ではないというのは、佐藤さんがいろいろおっしゃられたように非常にしゃべっているように書いているというのは、自分のスタイルにピッチなので。

花づくし さざんか・一月

さざんか

風が吹くと さあっと 散る

冬の蠅一匹 止まっても 落ちた

さざんかの 散る花に

一生懸命 生きたものたちは

優しく 包まれて お葬式

おれは どこまで 生きたか

さざんか 雨でも 散るのか

考えていたら 寝そびれ

夜明け 灰色を叩く雨

さざんかの花びら 雨に散り

水のながれに 逆らいもせず

一列に群れて 下水溝にながれる

傘をさしかけていた

??ああ、会いたかったなあー。その駅で歩いていたら、バツリ会って「一杯呑もう！」という感じで
すよね、鳴海さん。赤提灯あいたら「鳴海さん」という感じ。ほんとうに鳴海さん、鳴海さんで……です
ね。

神

あなたは殺されるべきであった

または死ぬべきであった

シベリヤの原野のなかで

うづくまのような型のままくずれると

おれの眼のなかで

ひっきりなしに雪が交差してふりこみ

白い合掌のかたちになる

(おれは あなたに棄てられたと思わない)

おれが眼を閉じるまえに

眼をそっと開けてみる

今日もシベリヤでは

生まれてくるものに出会えなかった
無明の修羅に おれは合掌している
白馬に乗った あなたが見える
玉座という神の座が こっちから去る
おれが死んでゆくとき
あなたは殺されているべきであった
または死ぬべきであった

次は、一番好きな詩で短い詩なんですが「鶴」。「鶴」という詩があるんですけど、何かこれ、胸に迫って。一番鳴海さんのなかで何というか帰宅の途中で口ずさみたいなという、何かそういうもの哀しさに充ちていますね。

鶴

鶴は群れてなぜ帰ってきたのだろう
鶴はなぜ忘れないで帰ってきたのだろう
鶴はなぜ雪だけを信じるのだろう
鶴が北の方に飛ぶ日は 雪がふる
鶴が全身をふり羽毛を一本ずつ落としている
枯れた野菊を焼く早春を包みこんでいる
包みこまれてきれいな祖国はどうめいになる
どうめいな雪で ナホトカも薄く白く染まる
根雪の上ですぐとける 淡雪になる
鶴は祖国で何を見てきたのだろう
ぐるーう
なぜもっと寒い北に 鶴は帰るのだろう

??ありがとうございます。(一同拍手)この会が来年も再来年もずっとあって、ずっと朗読したいと思っています。(笑)

鈴木比佐雄 次は尾内達也さんをお願いしたいのですが。尾内さんは「COAL SACK」で詩と同時に翻訳もされています。その詩はなかなか個性的な詩人で、ピアニストであり詩も書いている詩人なんです。これからもずっと翻訳をしていってほしいと思っています。

◇尾内達也

今日の朗読を鈴木さんからお願いされた時に非常に難しい課題を受けまして、それは「鳴海さんの詩を英訳してくれ」というお話だったんです。それで、私は一応仕事で英語から日本語にはまあ訳しているんですが、日本語から英語にするというのは、思ったほど距離が、短いと思われる方もいるかも知れませんが、非常に距離が長いんです。それで、私は英文学者でもないですし、英国とかアメリカに長らく居たというわけでもありませんので、一応英訳いたしまして、それを今話題のミクシィ(mixi)というインターネットの | ご存じの方はいらっしゃると思うんですが?ソーシャル・ネットワーキング・サービスに書き込んだんですね。それでほとんどネイティブのような方がその詩を読んで、こうしたらいいんじゃないかとか意見をいただきまして、それを踏まえてつくった次第です。

それで、鈴木さんからそのお話を聞いた時にちょっと閃くものがありまして、というのは、鳴海英吉さんの日本語を英訳するということは、いきなり英語の詩を朗読しても、それは皆さんわかりにくいわけですよ。初めに日本語の詩を朗読したあとに英語の詩を述べるという形が、ベストだろうと思ったんです。それは、そうすると鳴海さんとアメリカ人の鳴海さん、あるいは英国人の鳴海さんとの対話になるのではないかと思ったんですよ。それで閃くところがあって、では鳴海さんと他の詩人の詩を対話さ

せてみたらどうなるかと、そういうコンセプトで今日の朗読は組み立ててみました。

ということで、一番初めに鳴海さんの「雪〈4〉」という詩と、それと英訳した「SNOW 4」という詩をまず読ませていただいて、二番目に鳴海さんの「念仏ひじり」というちょっと長い | これは朗読するのはかなり難しい詩だと思うのですが?一応それを選びまして、それとパブロ・ネルーダの | ご存じのようにチリの革命詩人ですが | 「誕生」という詩を、取り合わせてみたんですね。それで最後に、あまり鳴海さんの詩の中で注目されてないのではないかと僕は思っていて、それでも何というのかな、鳴海さんの意外な横顔というのが現れている詩があるんですね。それは未収録の詩で、「秋の扇」という詩です。それと、僕が書き下した詩を取り合わせるという構成で読ませていただきたいと思います。

雪〈4〉

言い残すことは なにもないと言う
本当にないかと聞くと 本当にないと言う
じゃあ死んでくれ ああ と答えるから
毛布を頭まで上げてやった
すうーと気持ちよさそうに死ぬのである
わめきも 泣きもしない
おまえさんは こんな死に方でよかったのか
おれだけがブルッと身ぶるいをして
幕舎の入口でじゃあじゃあ小便をする
幕舎の外は又も雪
おい雪は空からふるなどと 言うな
烈しく暗い空に向ってふき上げるのだ
誰も信じてくれないから 言うな

SNOW 4

Eikichi Narumi

“I have no message to leave” he said.
“No message? Really?” I asked and “No”, he replied.
“Well, let you have a death”. “OK”.
When he answered, I drew up his blanket to his head.
He seemed to die comfortably,
Without screaming and crying.
I doubt whether you would be pleased to die such a way.
I shivered alone,
And urinated noisily at the entrance of the camp.
It snows again outside it.
Hey! Don't say such a silly thing as snow falls from the sky.
It blows up to the dark sky strongly.
Don't say that, as nobody believes it.

念仏ひじり

生まれ生まれ 生まれて
生の始まりに暗く
死に死に 死んで
死の終わり暗し

弘法大師

とおいむかしの うた だ
死んでゆく秋のような うた
するどく木枯しに ふきとんでしまった
うた ひたむきに散り いまは落葉
とうめいなものを分けてみたときの
うつろなうた
まぶたが うたう うただ
そんなうた

指先でくるむ そっと まゆのように
掌のなかで 温い 悲しみだけだ
どうして 白く長いまゝに
繰り出される 糸車のように
沈む 宿業のようなものが
くるっくるっくるっ と くりかえし
誰が この うた を傷付ける
こがね色に枯れる あしかび は前に
うた は うしろから 滅んでくる
見えない扇のように

ひじりが 念仏するとき
ときいろの海鳴りを聞いた
半月の水平線が ゆっくりと迎えにくる
荒れ果て おれの瞳の中で 見えた所から
手招いている 白いみ仏の顔が
あるはずのないものの位置にあって
長く鳴っていた秋雷が走り去ったところだ
うたは 影のように ふってくる
いまはもう 口ごもっても忘れはしない
うた 近づくともう去ってしまう
とおくで くりかえして うたう
前の 知らない花々は枯れる
うしろに とんだ 蝶 は落ちるだろう
生きているものは ここにはなんにもない
ないはずのものが
いま鮮烈な念仏となって流れる
もう消えたもののなかにとどまるものはない
蓮華三昧院も ないのかも知れない
凍てついた雪の下をぐり水
貞応三年六月ここに始まったものではない
あつたものとするはずのものも流れる
流れ流れ去る それは うただ
割竹を引きさいて去った ひかりと風は
ヒュウヒュと もがり笛を鳴らしてふく
水と風がこれほど あふれようとする
その叫び声があふれようとしている
その呼ぶものの彼方 ひじりは流れる

この うた では人は黙して立ち去るだろう
あまりにも低く悲しい つぶやきだから
それでも とぎらせてはならぬ

まだ 誰も聞きとれなかった
あざやかな 牡丹の花の修羅
いつまでも そこで泣いている女がいる
こきざみに ふるえる肩に
手を置くように やさしさを伝えておくれ
その女は こまやかな雨で
大島つむぎと黒髪が 濡れている

誕生

パブロ・ネルーダ

田村さと子 訳

ひとりの男が生まれた
生まれでた多くの人びとのあいだに
生活した
生活する多くの人びとのあいだで
だが 語ろうとしているのは 身の上話ではなくて
生地についてである
そこは チリの中央部で
葡萄の木々がその緑のちぢれ毛をからませ
葡萄は光にはぐくまれ
葡萄酒が人びとの足もとから生まれるところだ

冬に
その男が生まれた場所は
パラル という

もういまは
生家も通りもない
アンデス山脈が
その馬を放ち
深部のエネルギーが蓄積されて
山々はいきり立ち
村は地震に襲われて
消滅してしまったのだ
それで 日干しレンガの塀も
塀にかかれた肖像画も
薄暗い居間の
ガタガタの家具も
蠅が切断する静寂も
なにもかもが
こなごなになってしまった
わずかに姿と血をとどめたのは
私たち数人と

葡萄酒だけ

葡萄酒は生きつづけて
葡萄の粒にまで昇り
さすらいの
秋によって
摘みとられて
黙りこくった压榨桶の中に
樽に降りてゆき
そのまろやかな血で染める
そこでは 恐るべき大地の
戦慄のもとでも 葡萄は
裸のまま生きぬいたのだ。

わたしは 風景も
天候も 人びとの顔も 姿も
なにも憶えていなくて
ただ うっすらとした埃と
夏の終りと
墓穴のあいだに
母の夢をみるために
連れて行かれた墓地在
記憶にあるだけだ
だけれど わたしは
母の顔を
見たことがなかったので
逢いたくて
死者たちのあいだで 呼んでみたが
ほかの埋葬者たちとおなじように
母はわからず 聞こえず 何も答えてくれなくて
息子もなしに ひとりきりで
ひっそりと
影の中に隠れていた
ここで わたしは生まれた
地震だらけのパラルで
わたしの母の亡骸から
芽吹いた葡萄の実が
たわわに実る地で

秋の扇

白いものに 素直な憧れの持てる日
誰が 私を傷つけた
むなしくどうきする胸に
さらつと 秋の扇が広がる

秋が老いてゆく
このつつましい季節のなか

あなたの体温が 蘇ってくる
この向日性に似ているものを
私の喪章とする

冷たい風の吹き上がる日
秋の扇を閉じ
さりげない別れの言葉が
こまかな白い雲になってしまう
水のやうに澄んで??

無題、あるいは一つの追悼詩
尾内 達也

詩を読んでいるのはぼくではない
詩を読んでいるのは
澄み渡った空の青
日ごと深まる海の色
うしろばかりを吹く秋風である

詩を読んでいるのはぼくではない
詩を読んでいるのは
一太刀浴びて岩の上
若きえみしの憎悪の瞳
老いた隼人の露の髭
詩を読んでいるのは
遠い遠い昔から
この世の逆しまを生きた人々である

詩を読んでいるのはぼくではない
詩を読んでいるのは
詩を呼ぶ者である
呼びながら声なき声となり
霧の中の歌となる
地上を照らす月に日の
あをあをと またあかあかと
海を信じた者たちへ
深く蔵してほのかなる
ほのかなるもの笑いかな
ほのかなるもの心かな

月に日やこれが最初の村祭

詩を読んでいるのはぼくではない
詩を読んでいるのは…………?

??ありがとうございました。(一同拍手)

鈴木比佐雄 どうもありがとうございました。先ほどの「秋の扇」というのは、鳴海さんの十代後半の詩ですね。ちょうどあの当時、戦争に行く前後のそういうような時期だと思ったんですが。アテネ・フラ

ンセが何かに通って、その頃だったんじゃないかと思うんですけどね。今朗読を聴いて驚いたのですけれども。

それでは遠山さん、お願いします。遠山さんは鳴海さんの親友だった方で、いろんな思い出も含めてちょっと語っていただいて、あと朗読と。それから、この前ちょっと朝倉さんの出版記念会でタップダンスを披露してくださって驚いたんですけど、もしもお時間があつたら……でも、ちょっとここでは無理ですね？

遠山信男 ここでもできますよ。

鈴木比佐雄 ああ、そうですか。(笑)

◇遠山信男

ただ今ご紹介いただきました遠山です。鳴海さんは関東大震災の時に生まれたわけですね。私はその二年前の大正十年に生まれています。それで鳴海さんよりは二歳上で、現在八十五歳です。そこで今、ちらっと閃いたことを手がかりにして話してみたいと思いますが、鳴海さんほど「生きる」ということに拘り「死ぬ」ということに拘った人、やはり“生き死に”のカナメにかかわる「死」の意味を、ほんとうに自分ひとりの問題でもあるわけだし、全生物を含めての生きているということの、また死ぬということについての、そういう思想的な課題を深刻に考えつつ生きた詩人は、ということになりますが、鳴海英吉詩においてはそのことは、特に疎かに出来ないものがあることを強く感じますね。それで最初に私は、鳴海英吉の詩もですけど、若干説明が必要ですが、私が身近に接する機会があつた、それぞれの詩人七十名程についての感興をモチーフにしてつくった「人名抄」という詩のシリーズがありますが、その中に「人名抄・50」?鳴海英吉?(光芒・四一)があります。それを読んでもみます。

わだつみの声なのではない

それは

たしかに

凍土のシベリヤから

雪崩れてくる声なのだ

*

雪の夜からの衝迫

シベリヤの空と

遍路みちと

ふさ子の髪と

けれど嗚咽は封じられなければならない

なむあみだぶつ

行手はしっかりと頂戴する

この詩は一九九七年九月に、前掲「光芒」に発表したのですが、鳴海さん七十四歳のときで、まだ壮健で活躍中でした。それで三年後に他界するなどは誰も思ってもみないことでした。

ところで前述の当の「人名抄」について、鳴海さんはどう思ったのでしょうか？ 確実なことは、異議の申し立てめいたことは無かったということです。また私自身の気持ちとしては、短詩行の人名抄において、これ以外の書きようがあるはずもなく、その点の趣意を鳴海英吉は確かな阿吽で受けとめてくれているはずと思っています。なお「人名抄」について言及させていただきますと、当然のことながら、鳴海の渾身の深みにかかわる婚約者ふさ子のイメージを、たった五文字の「ふさ子の髪と」としての極限象徴のシンプルなフレーズで表出させているつもりなのですが、さて、『全詩集』においてのハイライトの重みをもつ「五月に死んだ ふさ子のために」で焦点化されているように、戦争体験中のあらゆる苦難の局面で、死んではならぬ！ 生きぬくのだ！ とする氣力の真っ只中で、いつも守護靈のようになって立ち現れるのは鳴海にとつての掛替えないふさ子であつたに違いありません。しかし、一九四七年八月十五日に、引揚船大拓丸で舞鶴に接岸上陸した鳴海に認知された厳肅な事實は、二年前の四五年五月の横浜大空襲でふさ子はすでに焼け死んでいたということです。いうまでもなく鳴海

英吉にとってこれはあつてはならない大変な衝激であつたろうと思います。そしてまた、この衝激の意味構造をどうとらえるかということ、しかしいずれにせよ、ふさ子の亡滅を無気力に忘却の彼方に流し去ることを拒否し、自分の存在をかけての対応が問われている重い衝激として受けとめているところに、鳴海英吉の稀有な人格像の顕現が認められると断ずることが出来ると思います。

要するに、不測の危険が充滿している兵役から無事に帰還することを祈って入営当日に見送りに来てくれ、入隊後も何度か手紙をくれた婚約者ふさ子が、戦争という米軍による無差別都市爆撃によって焼き殺されてしまったという社会的、政治的文脈を鳴海は絶対に許すことはできないという信条を、いまは亡きふさ子への愛の信条に同化させ、さらにも詩の創造的展開へのエネルギー源とした、とさえいえる見事さを見届けないわけにはいかないと思います。さらにいうなら、『ナホトカ集結地にて』はシベリヤから帰還後に記憶とイメージを編集して構成した戦後詩を画期づける壮大な叙事詩的叙情詩ですが、シベリヤ帰還後の鳴海英吉の全詩集の根底をとらえこんでそこにマグマの役割を果たしたのは前述の信条の持続であり、鈴木比佐雄流にいうことが可能な反復論の実践そのものともいえるかと思います。というのは、鈴木比佐雄反復論の骨子は《例えばキルケゴールの「反復」とは、追憶が後方に向かって反復されるのに対し、ほんとうの「反復」とは前方に向かって追憶されると言っている。このキルケゴールの「反復」のように鳴海英吉はシベリヤを前方に追憶しつつけたのだ。私はこの鳴海英吉の戦争体験を反復する生きる姿勢こそが、戦後詩の原点であると教えられ、そのことを強く確信し始めたのだ》(『鳴海英吉全詩集』四七六頁)と述べているように、鳴海英吉全詩集の内実は、『ナホトカ集結地にて』を中心として、鈴木比佐雄反復論の評尺のたしかさを、奥深くも「行手はしっかりと頂戴する」(人名抄)かたちで実証してくれるであろうと思います。

＊

ところで本日の第三回鳴海英吉研究会は、本年六月二十日に八十七歳で逝去された宗左近さんを偲ぶ会ということでもあるわけですが、『炎える母』の代表詩集によって著名な詩人である宗先生に私にご縁をもつキツカケらしいものを得たのは、先生の十冊目の詩集である『鏡』を詩人会議の詩集評でとりあげたときでした。《眩暈感覚が現代社会の無機物的物性の囲繞の中で語られる落下としての戦慄をもたらし、少年の瞳や少女の瞳をとおしての無垢性への愛や、透明な形象への嗜愛が、「宙吊されている明日の鏡の裏側」に底なしに魅せられたように表象されている。》と評し得たわけでしたが、するとその後すぐに詩集『お化け』(青土社)が贈られてきました。当詩集には文明批評としてラジカルな氣息の漲りが見られ、発語する詩行は、苛烈な内なるマグマからの必然による噴流の相をになっているように思えました。龐大な詩篇の中からの一篇に眼をとめてみました。

お化けが祈るなんて

自己矛盾です

でも

祈らざるをえないのです

祈り以外に

もはや自己矛盾はない

のですから

自己矛盾以外に

わたくしの存在はない

のですから

(「お化けの祈りA」)

いつか私は、といっても五十余年も前のことですが、岩崎書店刊『哲学小辞典』の中の「??生命もまた矛盾せる過程である。細胞の不断の死滅と更新こそは有機体生命の条件をなすものである。生命とは不断に考へられ且つ自己を解決するところの矛盾である。」という言葉に出会い、これは一生忘れないだろうとの身震いするような衝撃を受けた覚えがありますが、宗さんの右の「自己矛盾」の詩も、ただ今の引用言と通底するところがあつて興味深く思いました。そこで宗さんの思い出にかか

わることで特記したく思うことの一つに、一昨年四月五日、『鳴海英吉全詩集』第一回刊行会時の講師・宗左近、演題《鳴海英吉における「国の記憶」》がありますね。そのときの詳しいことは「COALS ACK五一号」に収録されていることですから省略するとして、特に印象深く思ったことに絞りますと、「今日は僕は、鳴海さんの最も重要な仕事だと思う詩集『ナホトカ集結地にて』についてだけお話をします。」として『全詩集』の中の所定頁を指示しながら、「夏」「北」「棺」「零(ぜろ)」「神」「雲」をそれぞれ全詩行朗読し、それについての実に読みの深みを尽くした評釈をしてくれた上で、一旦鳴海詩からはなれ、メキシコのノーベル賞詩人オクタビオ・パスの《詩は国の記憶である》という言葉に触れ、《「国」というのは、僕の言葉に直せば「詩は、宇宙の創生と消滅との、そしてそもそもの生命の誕生と死亡との、双方の同時記憶の喚起のことであり」と示唆した上で、人間世界の根源的な価値観の相剋のありように触れ、現代文明社会においての価値観の延長線上に括られる死の位相、とりわけ「二十世紀は戦死者総数一億七千五百万人」などの文明批評に及び、また芸術上の動向「超現実主義宣言」を始めとする、美術を含めての多様な芸術運動の核心に触れ、ブルトン、ピカソ、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、リルケ、アクション・ペインティングのジャクソン・ポロック、フランスのジュール・シュペルヴィエル、メキシコのオクタビオ・パスなどのことが語られる文脈の中で鳴海英吉が呼び出される。

つまり「戦争を起こし戦争をおし進めていく集団は、いつの時代でも使用価値を生産し、それによって金銭の利益を得ようとする欲望なのですから、つまりは、文明の発達そのものが戦争を行う原因なのでしょうから。大問題の前に私たちは立たされていますね。いったいどうすればいいのですか？三百年前、「造化に学べ」つまり「大宇宙に学べ」と芭蕉は言いました。そして造化に学ぶことこそが俳句、つまり現代語に直せば「詩」なのです。今、まずここに居る僕たちは、目の前にある『鳴海英吉全詩集』を繙き直すことから人類生死の大問題への道を学んで行くべきなのではないだろうかと思えます。」

このように故人・鳴海英吉の詩集を評価してくれた宗左近先生の魂魄のコスミックな波光に感銘を深めるとともに、さらにも八十七歳にして他界された先生のご冥福をお祈りするものであります。(宗左近さん追悼の一文は、千葉詩人会議・滞第二八号拙文後半を転用いたしました)

……(このあと遠山氏は会場で、フランス民謡「アヴィニョンの橋の上で」やロシア民謡「カチューシャ」など計四曲を原語又は日本語で歌いながら自慢のタップダンスを披露し、拍手喝采を受けた)……

鈴木比佐雄 次は岡山晴彦さんです。岡山さんは、山本十四尾さんが主宰されている「衣」の同人です。鳴海さんの詩集を読んで評価していただいて、今日は来ていただきました。

◇岡山晴彦

私は同人になってから詩を始めたものですから、まだ六、七年でございますので、ちよつとどのへんまでできますか。先に朗読をさせていただきます。

私が詩の中で一番いいなあと思ったのは「木食ひじり」、それから「鶴」の姉妹編で「糸」というのがあるんですけどこれが一番好きなんですけど。ちよつと長いのですが「木食ひじり」を読ませていただきます。

木食ひじり

今年も夏の長雨がつづき 肌をおそう寒気も

去らず 稲穂は出でずに青く立枯れている

地霊の呪縛は今もとけずに腐りつつある

凶作がくることが いまは必定となった

一揆の衆 全て斬首と決す

くらい北津輕の空 六尺の血がとび

六尺の百姓 ことごとく死すか
ひこばえ草 風にふかれ
ふかれして 骨をなぶる
一村すべて滅亡し 一郷立ち腐れてしまった
北津軽の大地にはなにがあるか
なにもない

俺はいま 米麦粟ソバ大豆の五穀を断つ
木食戒を終り千日をすぎた
それからおれは人間の作りうるものを断ち
全身の汚物を洗う水だけを呑み
いま 入定のときを数えている
この しがらびた指で 数えている
眼をあけても それはひどく眠いものだ
湯殿山注蓮寺貫首より(海)の一字を受け
結縁してから長い歳月がすぎたと思う
木食戒をつゞけ 木食ひじりと呼ばれた
俺は“即身仏”として木乃伊になる
五十六億七千万年後の
ミロク菩薩の救いを待っている
一切の宿業を断ち 現世を捨てる
俺は百姓たちの願望を知っている
全てを収奪されつくしたものは
俺を仙人沢に送り 俺を木乃伊にし
太陽とその熱量を 豊作を祈願している
その百姓たちの くぼんだ眼のなかで
俺はするどい殺意を感じた
この残酷な供物を 仏よ 受け給え
俺は殺されるのだが
殺すこの百姓をどうしてとがめられる
権力を奪取することの出来ないものが
俺を 荒涼とした仙人沢に埋める
青竹一本を立て 呼吸穴とし
一椀の水と鐘と撞木が与えられると
容赦なく 赤い砂土を 投げ入れてくる
三年をすぎて掘り出され
俺が見事にくすみ切って木乃伊となるか
沙石のように粉骨にくだけているか
俺も百姓も賭けるのだ
生乾きの木乃伊は 内臓をさかれる
曼荼羅堂から吊し下げられ
炭火で乾し 土ケ色のしなびた木乃伊となる
俺は木乃伊になる
仙人沢の野づらを俺の地下からの読経が
夜と昼をつなぎとめる まだ生きている
俺と一緒に偶然に埋められた地虫よ
ともにおれと身体をぬくめ合えない

俺はいまは 仏と人間との
あの裳のような不透明な無明のなかにいる
すでに 情念もなく 百姓の願望も忘れた
僧もなく 経巻もなく 仏もない
呪縛のきれいな修羅の中で死んでいる
寂するとは かくの如きものを云うか
くらい棺のなかで おれは枯れ 枯れよ
たゞ唇にしずかに真言を誦している
おれは“名子”という農奴の子だ
間引きされるとき俺は笑ったという
生みの母はその笑顔に俺の首にまかれ
た手拭をゆるめたと伝えられる おお
生れたばかりの俺がどうして笑うこと
が出来る
生れたばかりの俺が笑ったと云う虚実が
おれを追い立てて いまをすぎていたか
枯れ果てる山々の中に黄ばんでいる
この末法の仮象はすべてがむなしい！
放浪の行きつく野に仏 石仏たち この人間
その無量に流しつゞける涙の数を具象する
この助け給えと怨念を唱題して
このくらい北津軽の大地を這う
この苦渋にみちる百姓の業
みぞれまじりで 白くふりこめてきよう
むなしいぞ法輪を廻すことも
野づらには死 地霊には火 五行の風塵
おれはふかれて散るばかりなのだ
しずかに北津軽は新雪がふりこめてくる
出羽の山々の根雪となる
それは 烈しくなだれるようにふりこめて
すべては忘れられて 白く埋もれる

(一同拍手)……ちょっと長かったのですが、「糸」というのはちょっと対照的に非常に叙情的なものが現れている詩だと思うのですが、この「木食ひじり」というのは声を出して読んで迫力のあるものということで、この詩を選ばせていただきました。この作品は、現在も出羽三山の一つ湯殿山の注蓮寺にある木乃伊で、木食行を重ねて即身仏となった本明海上人という方がいらっしやるんですけど、それが主題となっております。干ばつで荒れ果て、一揆も弾圧された。結局北津軽の大地を救うべく自ら生命を差し出して仏となっていくこの寂然とした上人の姿といいますか、まるでこの詩人に移ってことばを吐いて、(強調して)「吐いている」というような感じを受けました。これこそ詩人の語りかける力だというふうに私は思ったんですけど。

結局いろいろ読んでみますと、この詩人には日本の風土と土俗というのが憑依したような語り部的な力というのがどうも備わっているのではないかと思います。たとえばシベリヤが舞台でも、やはり根幹はそういうことにあるのではないかと思います。先ほどの佐藤先生や、水崎さんのあれにもあるんですけど、まあ素人考えなのですが、仲間内の会で昨年から『梁塵秘抄』とか説教節とか子守口説などをいろいろ囃る機会があったのですが、その時にふっとこの詩人のことをたまたま連想したんですね。それで、大袈裟なことを言いますと、詩歌の流れの中では結局『万葉集』とか記紀歌謡などというのは一つの聖も俗も併在したような形なのですが、やはり中世あたりから最右翼に王朝物、対極には庶民に伝えられた語り物の系譜というのがいわゆる流れてきたというふうにこの前勉強したんですけど。口承の文芸ですね、口伝えの文芸、これは中世あたりに始まっていると思うんですけど、先ほどもお話がありましたが、やはり今様とか説教節とか祭文、警女歌、口説などがその頃あって、今でも浄瑠璃とか浪花節、河内音戸、演歌などにこの歌の面影というのが残っているように思います。詩人のお父上が活動弁士ということだったんですけど、そういうふうなことでやはり自然と語り口というのが、失礼ですけど、身につかれたのかなあという感じもいたします。

やはり日本のこの民衆というのですか、底流にはいわゆる「情念」ということが特徴だと思うんですけど、情念でかたどった語りのエネルギーというのがやはり秘められているのではないかなと思うんです。それで、「時としてこの王朝物とか対極のものが衰えると、それがマグマのように吹き出して詩歌の世界を潤した」というふうにこの前ちょっと読んで感じたんですけど。この詩人はやはり、庶民に流れる情念というのを掬い上げて、独特の語り口で素晴らしい詩として評価されたのではないかと私は感じました。

現代というのは、混迷する現代、だんだんまた中世的になってきているという説も最近出てきているんですけど、「情」というのを「こころ」と読む日本人の気持ちは大変貴重だと言う方、それから、明治から戦後にかけて文芸土壌でいわゆる西洋擬きの危うさなど、多々意見はあるようですけど、もし詩がある意味で、こんなことを私、全然、まだ一けたの詩歴もないのにこんな事を言ったらおかしいんですけど、もし行き詰まっているとすれば、一つの転換期の時代の先駆者として新しい方向というのがどうも示唆しているように私は思って、この詩集を読ませていただいております。

「俗の世界」とよく言うんですけど、日本の流れではやはり俗の世界という流れがひとつ底流にあって、何かの時にやはり出てくる。浮世絵なんかもちやうさだと思うんですけど。芸術にやはり評価されていく特徴があると思うんですけど、やはりその流れかなという気もいたしております。だいたい私

の感じとしてはそういうことでございます。

もう一つ、この詩人というのは青年時代に左翼活動、あと仏教に傾倒しておられますが、おそらく転機となった次のことばに私は心打たれました。「詩論・エッセイ」の中で「死んだ兵士の眼で……」というところがあるのですが、これはちょっと棒読みですけど読んでみますと、

《戦乱のなか、釈尊が追求していった絶対平和、そして、み仏の前で は一切平等利益ということを考えています。ある意味では、仏法は 人間の根本的な解放を目ざしている思想体系だとも言えるのでしょう。本来仏身である人間を冒すものへの闘いであります。それは言 いかえると民主主義を目ざす一つの形態であるとぼくは信じ切るようになりました。》(『全詩集』441頁)

??というようなことが書いてあるので、非常に私の心に残ったことばでありまして、若い時は左翼活動、あと非常に仏教に傾倒していたかたということの気持ちが非常にここで融合された形で、思想と詩というのが融合されたような形で自分の思想体験の中にもこの詩人は入って来られたのではないかと私は思いました。だいたい以上でございます。(一同拍手)あと、「糸」という詩もたいへん私は好きです。

鈴木比佐雄 最後に水崎さん、お願いします。水崎野里子さんには、「COAL SACK」でずっと鳴海さんの詩を翻訳していただいているのですが、鳴海さんを世界に発信するための重要な人材だと私は思っています。あと、先ほどの尾内さんにも少しこれから担っていただこうかなと思っているので、よろしくお願いします。

◇水崎野里子

失礼申し上げます。私はそういうわけで、世界係でございます。大変貴重な役割をいただきまして、感謝でございます。実は、この頃稼ぐに一生懸命になりまして、月火水木金教えておりますので、土・日は寝ているか原稿を書いているかで、こういう貴重な会合はほとんどサボって(笑)おります。失礼しておりますが、やはり今日参りましてやはりお教えいただくこと多く、来て良かったと思います。それで、読ませていただく詩は二つしか持って来ませんでしたので、前座として、ちょっと申し上げます。一つは、先ほどまず、佐藤文夫先生が資料として配っていただいております、警女の説明を拝見いたしました。また、「人権と部落問題」と下に書いてあるのを拝見いたしました。実は私、警女を詩に書いておりまして、千葉県詩人クラブの今年度の詩集に載せていただいております。字数の制限がございますので、ちょっと切らないといけませんでしたが。それで、警女に関して、まず申し上げたいと思います。水上勉さんが彼女たちについてお書きになられていますね、「はなれ警女おりん」です。また秋本松代さんという劇作家がありますが、秋本松代さんは一般に、そういう底辺のところで生きた女を、民族的なアプローチを混ぜてお書きになられています、『かさぶた式部考』など。それで、はっきり申し上げて、かなりきわどい場面をも入れて私は詩を書いたのです。きわどいって言うたって私が書くのだからたいしたことありませんが。ですが、この頃それをちょっと、英語の翻訳の方などが忙しくて、忘れておりました。そういたしましたら佐藤先生が今日いらして、「人権と部落問題」、そうなのです。結局、まず女性であることというのは、この頃もやはり依然としてその問題と無縁ではありませんですが、それから特に社会の底辺の、盲目の彼女たちの「遊女」としての存在です。恐らくは、人権問題もあつたわけでしょう。今の私たちぐらいたと、セクハラだって、裁判すれば勝ちます。ところが、できなかったのです。それは彼女たちだけではなくて、多くの日本の下層、下層と言っても悪いけど、いわゆる自活していかなければならぬ女たちの運命でした。ですが、彼女たちの遊芸が逆に日本の芸能の底流を作って行ったのです。西洋だって、実はそうなのです。ところが、日本の近代は、同じ「底辺の文化」、そこあたりを抜いたところで西欧文化を輸入してしまっています。だから、日本の文化全体がおかしくなってしまったわけです。

今年の十月に、アメリカのシアトルに行きまして、アメリカ翻訳者会議に出席して来ました。そこでいただいて来た、英語で書かれた資料を最近読んでいましたら、中に中国の「詞」の説明のエッセイがあったのです。英語圏の教授で、日本にいらしている方が英語で訳して向こうの雑誌に載せた詞の訳文とエッセイです。これは参考になりました。「詩」と「詞」という | | ちょっとその説明をいたします。

「詞」というのは、いわゆる日本の『梁塵秘抄』などに通じる、中国語で歌われる抒情詩です。遊女が歌ったのです。翻訳者は英語で「Courtesan（エンタテイナー）」との用語を使用していましたが、中国でも、彼女たちに関する独自の文化があったわけですから、柳とかね。「柳」はすでに彼女たちのシンボルです。サンフランシスコのチャイナタウンの柳、など。それでたいへん、私は興味を持ったのですが、申し上げたいことは、それが英語に訳されるとすごくきれいな抒情詩なのです。そして、この文化は日本にも流れ込んでいる、あるいは相応の文化があったわけです。ソーシャルステータス、あるいはヒエラルキーというのは、むずかしく、何が上で何が下か、現在、実は分からないのが実情だと思います。ですが、一応、彼女たち、いわばアンタッチャブルです。そういうアンタッチャブルの文化、そこに彼女たちの詞、芸術の根本がありました。

あと一つ、申し上げます。宗左近先生の鳴海英吉の講演を私、覚えております。「神」という詩を引用なさいました。神??あなたは死ぬべきだったと。生死の問題をやはり出していく。「生がすでに死であって、死がすでに生だ」と仏教思想について誰かがおっしゃいましたが、一般にそのへんの兼ね合いというのは素晴らしいと思うし、英語の詩ばかり読んでいますと、逆に、そういういわゆる違いが見えて来ます。何とはなしに、現在の日本で、キリスト教の方が優越で仏教的思考は無視、排斥される、「知」が上で「情」が下、そんな雰囲気を感じないわけではないのですが、広く我々の文化を宗教ではなく文化として見極める場合、我々の土俗性としての民間宗教をもっと前に押し出すことが必要と思います。警女も、日本的な、土俗的な存在として、逆に私の興味を引き付けました。

私、鳴海英吉の詩の輸出の方を担当させていただいております。「船」という詩は、次に山本聖子様などが鳴海英吉と女性についてのシンポジウムをなさいますが、やはり私、ここに来て、警女の話から始まって、引っ掛かりがあるのは女の問題で、それも、いわゆる上流階級の女性ではなくて、いわゆる最下層の女や、庶民の女に興味があります。それで、やはり女の眼から見ますと、戦争で、亭主を連れて行かれて、殺されてしまって、英語を勉強して、世界中反戦詩を発表しながら歩いているという女性詩人も、私は知っています。それから当時、「銃後を護る者」とか、「靖国の母」とか、持ち上げられてしまい、息子を戦場に送り出した、そういう、女性の戦争責任の問題もあります。現在、私の次男がかつての兵士と同じくらいの年齢なのですが、どうして母親が息子を戦場に送り出せたのか、私にはわかりません。「船」というのは、これは、私は故意に、そういう視点から実は選んだ詩なのです。まず日本語で読みます。

船

おながが大きく 肩で呼吸している女が
復員船をみているから どこから来たと聞く
アルタイから 一週間も列車で来たと言う

おれの出征する夜
大きなお腹の女房に手をおく
ぴくっ と動くから
おれは あわてて手をひっこめた
女房の奴 デキなくてすいません
お金を出して 思い切り遊んできて下さい
と言うから おれ 女房をぶった

子供がお腹にいるから きつい眼で
夕陽にとける灰黒い船を女は見ていた
そいつはシベリヤに残るべきだと言うと
ちがいます 日本には奥さんもいるでしょう
あたしも愛しぬいたのです
きっぱりと言い切って女は笑う

そうですかあ 愛し合ったんですかあ
おれは奇妙に間抜けた返事をした
おれは愛など信じないまま 生きてきた

大平県小町郡有田町
これがあの人の住所です
みせてくれた日本文字のメモ
日本にこんな県なんかないんだ
おれは言いかけたがやめた
あってもいい

アルタイの草原の匂いのする女
おれの女房
じつと 女は船をみつめている

こういう女の運命というのは、世界中どこでもあるわけです。戦争に関していえば、基地の女性も含めて、結局社会問題としてもあるわけです。そこにはやはり戦争と女の問題で、アメリカへ行ってそれっきり亭主が帰って来ないという話などは、たくさんあったわけです。そして、日本だって、同じことをしたわけです。この場合は、日本の男の方が加害者のわけです。一時、フィリピンかどこかで、やはりこういう関係がちよっと問題になったと記憶します。日本兵、あるいは日本の男と現地の女性の間に生まれた子どもの問題です。日本国籍が取れなかったりしたようです。それで、母親が運動すれば今は取れるのかな？ 知りませんが、それは、一時、社会問題として取り上げられたように思います。

では、英語を読ませていただきます。

The Ship
Eikichi Narumi
Translated by Noriko Mizusaki

The woman had a big belly and hard breaths
Watching a return ship for discharged soldiers
So I asked her where she came from
From Altay one week's long train travel she answered me

On the night of my leaving for the battle
I put my hand on the big belly of my wife
It gave me a jerk
So I alarmed my hand back
She said sorry I could not bear
With money please enjoy women as much as you like
So I beat her

With a baby in her womb so she had sharp eyes
Watching the grayish dark ship melting into the setting sun
The man should have stayed in Siberia I said
Oh no he has a wife in Japan

I loved him out to the last
Decidedly she said so and smiled

Oh yes I see you loved each other I see

I returned a strangely absurd answer

In my life I have never believed love

Arita-cho Komachi-gun Ohira-ken

This is his address

She showed me the note written in Japanese

In Japan we have not such a prefecture

I wanted to say but stopped telling her

There might and could be

The woman smelled of the plain of Altay

My wife

She is staring at the ship

次は「鮭」という詩を読みます。

鮭

鮭が帰ってきた

鮭は生まれたところに 産卵のために

うすい川のせせらぎを尾で叩きながら

青黒い背ヒレを見せ

鮭は生まれたところに帰ってくる

誰が鮭に生まれたところを信じさせたのか

鮭の上ってくる川を下ってゆけば

日本に帰れるだろうか

しぶきに叩かれつづける岩のかけで

産卵を終えた鮭が 沢山死んでいた

生まれた水のなかで

うす明るいひかりを見たような眼で死んだ

おれは突発的に

鮭のみちを下ってゆこうと思った

収容所に連れもどされた おれは

産卵のために上ってきた鮭を食いながら

川を下って行ったと言ったきりだ

生まれたところに帰る鮭は

うろこがはげ落ちて傷だらけだった

おれは取調官に向って不機嫌に言った

鮭は生まれたところに帰ってきた

やはりこれは望郷の想い。どこかで、鳴海英吉自身が書いています。帰りたいという感じのうまく伝わっている詩と思って訳しました。ロシアに鮭がいるわけで、北海道にも鮭がいたわけです。でも、今は鮭、北海道にいなくなり、ロシアかどこかの輸入にたよっているのではないのでしょうか？鮭、いるのですね、向こうでは。今、鮭は日本では、結構高い魚ではないでしょうか。

The Salmon

Eikichi Narumi

Translated by Noriko Mizusaki

Salmons have returned

they are supposed to come back to their native place to lay eggs

striking the current of the shallow river with their fins

showing up the back fins in the dark blue color

they returned to their native place

who made them believe it?

if going down the river where salmons come up

are we to go back to Japan?

the rock keeps hit wit sprays of water

behind it I discovered many dead salmons

they had finished laying their eggs

to die with eyes as if seeing the pale light

in the water where they were born

suddenly I thought of walking down their route

I was forced back to the camp

eating the salmon which came up to lay eggs

I only said I walked down just along the river

they had many injuries with their scales peeled down

I said so in a bad humor to the inspector

the salmon had come back to their native place

最後の行は、ブラック・ユーモアではないでしょうか？ 自分が、収容所に帰って来たわけでしょう？ 収容所をnative place なんて言っています。自分がsalmonのわけです。ほんとうは帰りたわけです。鮭が行く所へ行けば日本へ帰れる。そういう望郷の念を、ブラック・ユーモアを使って書いた、非常にうまい詩と思います。ブラック・ユーモアというのは、鳴海英吉を私は訳していて、しばしば感じています。彼は非常に上手くブラック・ユーモアを使っています。

そして、もう一つ。「卵を産む」のは、雌ですね。卵を産んで死んでしまう。この詩を選んだ理由は、私、人間の雌が、無意識に感じた、雌の鮭への「産卵」への共感であったかもしれません。どうもありがとうございました。

鈴木比佐雄 どうもありがとうございました。二部を終了します。第三部は五時までということでしたが、ちょっと時間延長しますので。五分くらいのちに始めたいと思います。

それで、次のシンポジウムの出席者は山本さんと鈴木さんと大掛さんですが、鈴木文子さんは何か貴重な資料もたくさんお持ちで、鳴海さんの女性像ということをかなり実証的に今日は話していただくことになっていますので、ぜひ拝聴していただきたいと思います。よろしくお願いします。時間は五時半くらいまでです。

◎第三部 シンポジウム／鳴海英吉の詩作における女性像

5時～5時 30分

コーディネーター／大掛史子

パネラー／山本聖子、鈴木文子

【第三部 シンポジウム】

－鳴海英吉の詩作における女性像－

コーディネーター／大掛史子

パネラー／鈴木文子、山本聖子

大掛史子 今日鈴木文子さんが大変貴重な鳴海さん関係の資料をたくさんご用意くださりまして、とても良いシンポジウムになる予定だったのですが、時間がなく、今回はちょっとこの資料のご紹介をしていただいて、これをもとに次回は鈴木さんにもスピーチでそれをふくらませていただくということにいたします。とても貴重な資料ですので、先にどういふものをお揃えいただいて、どういふお話をほんとはしたかったかというようなことを、ちょっと鈴木さんから皆さんにご紹介いただきたいと思います。

鈴木文子 そうですか。はい。

今回「鳴海英吉の詩作における女性像」という大変素晴らしいテーマでシンポジウムということでした。いただいわけですが、私にも前回の研究会でお話ししましたように、けっこう鳴海さんとは古いお付き合いで、私を「ふみこおー！」というような呼び方で呼ばれていた??今考えてみると、今日もうろろお話を伺ったりしていると、「えーっ、私、すごい人とお付き合いしていたんだな！」という感じで、びっくりしています。

それで、「女性像」ということはあまり今まで考えてもみませんでしたが、こういうテーマをいただいて思ったのは、やはりいちばん鳴海さんの根底にあるのは、先ほど遠山さんもおっしゃっていましたが、この「ふさ子さん」という十八歳で横浜空襲で焼かれてしまった婚約者が詩のエネルギーにもなっているし、結局鳴海さんの女性像の中にずっと生きていたというふうには思います。これはどなたもお感じになることでしょけれども。

今回いろいろ考えてみましたが、時間が無いのでそれは省くとして、鳴海さんは一九四四年、昭和十九年の二十一歳の時に戦争に行きます。それで「帰って来たら結婚したい」という手紙を書いたり、お父さんと、「お宅の娘さんをもらいに行きたい」と言ったりしてふさ子さんのお宅に伺ったりして、それでハンカチだけもらってふさ子さんは別れるわけですが、そして鳴海さんが戦地で、結局シベリヤに抑留されてサカロフスカ国立農場でペンキ塗りとか、それから道路工事とか、農業とかいろいろ、レンガ作りとかいろいろな雑役をやらされていた頃、ふさ子さんは横浜空襲で十八歳で焼け死んでしまうわけですね。

それで、鳴海さんが帰国するのは八月十五日。これもほんとうに何か奇遇だなあと思うんですけども、家族に戦友たちの安否を伝えるために水筒の中に戦友たち二百名の名簿の用紙を入れて帰っ

てくるわけですね。そして帰国した時に、ふさ子さんが焼け死んだということを聞いて、それでもすぐに彼は詩は書いてないんですね。いちばん詩を書くきっかけをつくったというのは、十五歳の頃からずっと詩は書いていましたが、帰国して詩をつくり始めたというのが、やはり二十八歳の時に福田律郎という詩人と出会った、それで生活詩集を出していた、その編集に加わった、というのが私は詩を書くいちばんのきっかけになっていったのではないかと思います。それから、二十九歳で「列島」が創刊されると、その「列島」の会員にもなっておりますので。そういうことで詩を書くきっかけができていったのかなあというふうに、もともと素質があった人なので、思っています。

そして三十一歳の時に、初めて「列島」の九号に「焼き殺された娘」、のちに「焼き殺された ふさ子」という題名で、初めて婚約者が焼き殺された作品ができております。これはもう皆さん『全詩集』の最初に出ている序詞をお読みになっている方も多いと思うんですけど。

そしてこの時に書いた作品がもたになって、それは時間がないのでちょっと飛ばすことにして、三十五歳で現在の奥様の伊藤すゑさんと結婚されています。三十六歳で長男が生まれて、三十八歳で次男が誕生されているわけですが、その三十八歳の時に、結局詩作を中断します。というのは、先ほどから皆さんおっしゃっていますように、不受不施派の研究に入ってくわけなんですけれども。やはりこの不受不施派というのは、いま私は「貴重な資料」と言われましたけどこの貴重な資料というのがその、鳴海さんからこういうの(資料を示しながら)を私はたくさんいただいて「ほれ、文子これ読めー！」とか言われたんですけど、この頃は「何だこんなの、何だか読みたくないな」と思って(笑)、こういう「異端」というものなんです。それで鳴海さんは、この中に加川治良という名前で「房総の不受不施派の周辺」という、千葉県の多古町のこととかいろいろ書いてありまして、鳴海さんが「ここ読めよ」とこうやって付箋をして、こんな親切にしてくれているんですけど、私はあんまりこういうのに興味がなかったんで読まなかったんですけど。でも不受不施派のこれをずっと、会報とかも鳴海さんは送ってくれていまして、これは昭和四十五年の一月一日の会報とか、それからこういう「立正御法会報」とか、こういう日蓮上人の三百回忌のとか、こういうのをいただいて、まだたくさんあったような気がしたんですが、私は引越しましたのでちょっとどこに行ってしまったかよく分からないんですけど。それから、こういう不受不施派のこの分裂のものを書いたものも、これは抜粋してこういうふうにしたものを送ってきてくれて、それで「ここ読めよ」というふうなことで。これには、読むように書いてあるのは、これは千葉県の多古町のことが書かれた所を読みなさいと。自分の地元なんだよということで読みなさいということで、何か鉛筆で斜線まで引いてあるんですけど。ああこんなのあったんだなあと思っています。

それで、これを三十八歳から四十八歳までびっしり十年間不受不施派。でも、鳴海さんの「葬送文・草案」(『全詩集』の「詩論・エッセイ」というエッセイを読みますと、「詩は視界から消えてなくなりました。凝り性です。」「他はどうでもいい!」「詩を十五年忘れていた」というふうに書いていますので、十五年なのかも知れませんが。年譜を見ると十年くらいなのかなと思ったのですが、そういうふうに書いているので、やはり十五年くらいはこの不受不施派にびっしり立正大学の先ほどのお話にもありました宮崎博士の門下生になって研究をされているわけです。

それで詩を書き始めるのは一九七二年の四十九歳になってから、「詩人会議」の先ほど最初に講演されました佐藤文夫さんの勧めで詩作を始めて、それからどんどん詩を書いていくわけです。五十歳の時に初めて「焼き殺された娘」という作品を発表されています。それは「詩人会議」の六月号です。それから五十一歳で「五月に死んだ ふさ子のために」という作品を書いております。この頃からもうずっとナホト力にかかわった作品も書かれておりまして、ふさ子さんへの想いと一緒にナホト力を書いてきています。そして五十四歳の時に、『ナホト力集結地にて』が詩集に、三十五篇だけの詩集になるわけなのですが、「死んだふさ子のためのメーデー」という作品が書かれております。それで、次の年の五十五歳で『ナホト力集結地にて』が七八年度の壺井繁治賞を受けられています。それからもうずっとナホト力を書き続けるわけで、結局ナホト力を書くということは、不受不施派の研究者のひとりとしてずっと戦争とふさ子に対する愛とかそういう想い、焼き殺されてしまったその想いを書いていくわけです。

五十七歳の時に、「詩と思想」の九月号で片岡文雄さんが「ナホト力」の批評文を書かれておりまし

て、「南無」というのは「たのむ」という意味であって、そしてよく詩集の中に「南無阿弥陀仏」とたくさん出てきますが、「阿弥陀仏」は「たのむ」を、「たすける」「たすけてくれ」という意味なのだということをお書きになっていますけれども、ああなるほど詩人らしい受け取り方だなあと考えていましたら、不受不施派のあれはちょっと違うんですね。《「南無」というのはインドのことで、いのちをかけて一心に信心する》ということだというふうに、不受不施派の案内を見るとここに出ているんです。これで詩人と宗教の違いというのが、ああなるほどというふうに分かったわけなんですけれども。

それから、時間がないので戻りますが、一九八一年五十八歳の時に「横浜・六月は雨」というのを書いております。いつもですと「ふさ子」という固有名詞が出てくるのですが、ここではもう「ふさ子」ではなく「娘」という表現をしているんですね。やはりこれは、娘として距離を置いてその婚約者を見られるようになったのではないかと、私は思いました。

そして、一九八五年の六十二歳の時に、『全詩集』のなかの最初の「接岸」という詩、これは鳴海さんが六十二歳の時に書かれたんです。この「接岸」が一番最後です。婚約者が焼き殺されてから三十年、その三十年という年月をもうずっとふさ子さんのことを思い続けて、そしていろんなものを書いてきているわけですね。戦争を書き、念仏を書き、ナホトカを書いて、戦友を書いて??というふうに書いてきているわけです。それで三十年経ってこの「接岸」を書いた時に、ようやく「鳴海英吉」という自分の中の岸辺に辿りついたのではないかと私は思いました。

それはどうしてかと言いますと、鳴海さんって昔からすごい区切り、区切りというのを大切にする人なんです。ここに紹介してきましたように、だいたい「六月は雨」というのは八月の終戦の日に発表したり、それからふさ子さんのことはだいたい五月か六月に発表しているわけです。そういう拘りのある人なので、結局「接岸」を書いて一つの区切りにしたというのは、次の六十三歳で『舞鶴から』という詩集を出しますけれども、この詩集の中に「接岸」と「五月に死んだ ふさ子のために」と「横浜・六月は雨」というのを載せているんです。やはりこれが一区切りであるのかなあ、まあずっとそれから思い続けはしますが、一区切りとしてふさ子さんを書いたんだなあと思っています。

それから六十四歳で、また彼はすごい私家版の詩集を出すのですが、『広島・碑文』という詩集を出されております。このあたりからだいたい心の旅というかそういう旅をするようになって、今まで知り合ってきた女性やら、それから広島のことやら、原爆などいろいろ書いていくわけですが、それが祈りの境地になっていくものが次の六十五歳で私家版で出される『女友達』というところに集まっています。ここにはやはり、不受不施派の念仏やら、いろんなものを旅しながら人情に触れたり、シベリヤに触れたり、亡くなった戦友に触れたりしながら書いていくわけです。

六十七歳で『銃の来歴』というのが発行されます。これは私家版で一月に出しておりまして、それで九月にはちゃんとした詩集として『銃の来歴』が出されております。

そしていちばん、先ほどどなたかたくさん読まれておりましたが、鳴海さんの詩集の中で『念仏』という詩集がありますけれども、この『念仏』の中に、彼が今までずっと抱いてきたいろんなものが??戦友の死とか、それから農民たちの詩とか、それから焼かれたふさ子さんの死とか??そういうものを念仏として唱えながら作品化していくということではないかと思いました。

それで、いちばん集大成として私が感じるのは『女達の来歴?RAAの女達』ということで、そこに集結されていくのだと私はこの女性像のことだけで言えば思ったわけです。私家版で『女達の来歴?RAAの女達』というのは十部限定で出たわけですが、十部限定で出されて、私は忘れられて(笑)、送っていただかなかったんです。そして「読んでくれたかあ?」っていつて電話が掛かってきて、「え、なあに? わたし、知らない」って言ったら、申し訳ないといってこれ一冊、十一部目のこの『女達の来歴?RAAの女達』を一冊作って送ってくれました。

ここに手紙が添えてあります。ここをちょっと読んでみますと《鈴木さんに届けられないとは大変なミスで、つくってみました。ごめん、すいません、申し訳ありませんでした》って(笑)書いてあるんですけど。これ、私はいちばん貴重で、そして鳴海さんの今まで書いてきた女性像の侵略戦争に対する怒りも、それから何か戦友たちへの想いも、ふさ子さんへの想いも、全部このRAAの女性達の中にこめられて書かれているなあとは私は思いました。「RAA(1)」の最初のところに、これは私たちがやっている佐藤さんが代表をしている「炎樹」に発表されたものですが、これを私の家で新年会が何かやった

私にとっても刺激的でありましたし、ほんとうはたくさんもう少し話しすべきことがあるのですが、最初の会の時にお尋ねした時に安易に「論を書きます」と口走って、未だに宿題をやっていないので、また今日ここに呼ばれてしまったなあということがあるので(笑)、ちょっといつかこれをしっかり形にしてまとめたいと思います。今回はこれで終わります。

大掛史子 ありがとうございます。山本さんはたいへん筆力のある方でいらっしゃいますので、その鳴海論、ふさ子の論をぜひまとめていただきたいと思います。山本さんにもいずれ今日のようなお話をもとにしたスピーチをお願いしたいと考えています。

やはり鳴海さんのこの詩集の最初にふさ子の詩を五篇持ってきたという編集方針が間違っていなかったというのは、今日のお話などを伺いまして感じます。全然詩を読んだり書いたりしない人が、まず鳴海さんの詩集の最初のふさ子のところを読んで涙を流して感動するわけです。しかもそれは、若い人に多いんですね。それで全く知らなかった鳴海さんの詩のファンになるという人が多いものですから、この編集方針は間違っていなかったというふうに自負しておりますけれども。今日はほんとうに時間がなくて残念ですが、お二人に核心をついたお話をしていただきまして、ありがとうございます。今日はこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(一同拍手)